

小田原史談

第 195 号

発行所 小田原史談会
小田原市栄町2-13-20
アオキ画廊内TEL(24)0637

文武館創立と竹添進一郎

武田敏治

文武館創立五十周年記念神奈川県柔道大会が、昭和三十三年(一九五七)七月六日、小田原市立城山中学校の体育館で開催された。この大会の執行委員長は、当時文武館の館長を兼任されていた社会教育課長、中野敬次郎先生だった。



先生のご執筆と思われるが、大会要項のなかの「文武館五十年のあゆみ」には小田原において講道館柔道が組織的な修業にはいつたのは明治三十八年(一九〇五)からのこと

で、最初、茶畑の正恩寺本堂で稽古をはじめ、その後諸種の事情で道場は変っていったが、明治四十年(一九〇七)小田原町立高等小学校(現二三の丸小学校)校庭の西南隅に新築の道場が完成、嘉納治五郎講道館長の命名によって修養館と名付けられたと記されている。これをもって、文武館創立といふことになるのだが、新築開館した道場の名付け親となった嘉納治五郎が小田原とどのような関わりをもっていたか、今年の春、東京春日町の講道館の資料室をたずねてみた。

資料室で差し出されたのが、竹添進一郎先生顕彰碑建立期成会(熊本県天草郡大矢野町)発行の記念誌『竹添進一郎先生を偲ぶ』だった。じっくり目を通すには、どうしても手元に欲しく、印刷所の

熊本県天草郡五和町の五和印刷へ連絡したところ、編集責任者の大矢野町の司法書士山崎信一さまより貴重な一冊をお送りいただいた。記念誌巻末の年譜によれば、嘉納治五郎は明治初期、日本の激動期に不世出の文人外交官として活躍された熊本県天草郡大矢野町出身の竹添進一郎の二女、須磨子と明治二十四年(一九〇一)結婚した。嘉納治五郎三十二歳だった。

竹添進一郎は朝鮮公使時代、明治十七年(一八八三)金玉均の乱(甲申の変)があり、翌年その責任を負うて官界を去り、東京帝国大学の教授に就任するが、明治二十八年退官し、同年小田原に閑居、読書、著作に専念する。その頃から、嘉納治五郎は妻の生家、竹添邸を度々訪れるようになった。竹添邸は、旧町名で十字四丁目、現在の南町三丁目に独抱楼と名づけられ荒久海岸添いの早川河口へ通じる道筋にあった。明治十八年(一八八三)柔術の牙城たる警視庁の天下の覇を争う武道大会において、他流の柔術古豪は創業日なお浅い講道館の紅顔の選士につきつぎと圧倒される。柔術時代は幕を下すことになる。その後は講道館柔道が全国各地で日の出の勢いをしめし、学校においても明治二十年(一八九七)ごろから課外として行なわれはじめたのである。当然、小田原でも柔道に対する関心が高まり、小田原町立尋常高等小学校の同窓生が体育部柔道班を組織し、竹添邸を時々訪れる嘉納治五郎との面会の機会を窺っていたにちがいない。その柔道班の中心となったのが、その後、修養館建築に際しても尽力された尾崎亮司、拝郷勇だった。稽古をしたくても相応しい場所が見つからず苦勞したことだろう。嘉納師範が探し当てたものか、青年たちの労力によるものか定かでないが、茶畑の正恩寺の本堂の借用を願い出て、明治三十八年、組織的な修業の第一歩をあゆみはじめたのである。講道館柔道の普及に精力を傾けていた嘉納治五郎にとって、町の若者たちの柔道修業への熱意には、胸をうつものがあり心底から喜んだにちがいない。早速、師範に佐竹信四郎三段、指導者として半田義磨初段(後、九段を当たらせることになった。嘉納治五郎は結婚後、すぐに熊本の第五高等学校の校長を任じられ、在任中に「瑞邦館」という道場をつくり柔道を奨励し

たように、あらゆる機会をとり
えて講道館柔道の発展に心血を
注いでいた頃のこととて、自ら
を頼って竹添邸へやってきた地
元の若者たちを大歓迎したこと
はまちがいない。

神奈川柔道連盟の沿革史で
も、小田原の柔道場開設は県下
で最も古いと記述されている
が、城下町として武道に対する
関心が深かったばかりでなく、
竹添進一郎の二女が嘉納治五郎
に嫁ぎ、竹添進一郎が小田原で
暮らすようになったことが最も
大きく起因したにちがいない。

明治十五年(二六二)講道館柔道
が下谷北稻荷町の「永昌寺」の
十二畳の書院を道場としてうぶ
声をあげ、小田原の柔道が明治
三十八年(二五三)茶畑の正恩寺の
本堂で誕生したとすれば、発祥
の地として相通じるところがあ
り、正恩寺へ続く茶畑の小道を
かすり木綿の若者たちが稽古衣
をもつて通う姿を想像し何かは
のぼのとした明治のロマンを感
じる。

永昌寺の書院も柔道の稽古場
として造られたわけではなく受
身の振動でぐらぐら揺れるので
和尚が「今に寺がこわれてしま
う」と悲鳴をあげ、翌年の二月
には南神保町の弘文館へ移り、
九月には上二番町の嘉納邸内の
敷地によっていったように、正

恩寺も同じようであったらし
い。しばらくして道場は町立小
学校裁縫室(現・警察署の所)へ
変り、次に西海子通り近くの船
大工小屋を譲り受け稽古を行っ
たといわれている。

そして、明治四十年、新築の
道場が完成し嘉納師範の命名に
より修養館と名付けられること

んな思いもする。

竹添進一郎は大正六年(一九一七)
七十六歳で十字町の竹添邸で没
するが、嘉納治五郎の日誌には、
家族そろって年末、年始にかけ
小田原で日頃の疲れを癒してい
た様子が記されている。

嘉納治五郎の長女範子は文学
博士、東京文理科大学教授綿貫哲

竹添・嘉納両家家族写真

(竹添先生の二女須磨子は嘉納治五郎に嫁いだ)



▲大正3年1月1日 撮影於小田原 竹添邸

- 前列右より
- 五女 篤子
- 嘉納治五郎
- 竹添進一郎
- 竹添 龜子
- 嘉納須磨子
- 三男 履方
- 後列右より
- 長男 履信
- 長女 範子
- 二女 忠子
- 三女 爽子
- 四女 希子
- 二男 履正

になるのだが、ここまで到った
経緯を追ってみても、竹添進一
郎の小田原在住をはずしては考
えられないことである。

その頃、嘉納治五郎は「青年
修養訓」という書物を同文館よ
り出版しているの、執筆され
ていた書籍にちなんで修養館と
命名したのではなからうか、そ

雄に嫁ぎ、現在の湯河原町福浦
に暮しながら講道館で女子柔道
の指導者として活躍していく。

たまたま自宅に押し入った泥
棒を捕えたことで、さすが嘉納
先生のご息女と村で評判になっ
たこともあった。いつも背筋を
伸ばし、床しい気品をただよわ
せた綿貫夫人、村の人たちと道す

がら出会うと自ら会釈される礼
儀正しい方だったという。

さて、嘉納治五郎に命名され
た修養館はどのように発展し、
変遷していったか「文武館五十
年のあゆみ」にしたがって今日
までの足跡を振り返ってみよう。

新築なった修養館は開館後、
修業者は漸次増加して小中学校
生徒、一般青年を加えて約三十
数名で活気横溢な稽古が行なわ
れるとともに、道場内では英語、
漢文なども勉強し、真に小田原
の青少年の修養道場の面目を示
した。

創立後の幾変遷

数年間活発な活動を続けた修
養館も、元来少数の有志によつ
て運営されていたので次第に経
費の不足を生じて中絶の止むな
き時もあったが、大正十二年(二
五三)再興を機として館名を文武
館と改称した。

今より凡そ一八〇年前、文政
五年正月(二八三)名君として聞こ
え高かった小田原城主大久保忠
真が、城内三の丸御勘定所跡に
藩校集成館を設立したが、同校
は一名を文武館、また文武稽古
所とも称した。

明治維新に廃校されるまで、
永く所謂「忠真公の文七武三の
教育」の方針が実施せられ、小
田原地方の文教の殿堂として重
きをなしたので、武道方面にお

いても諸流の達人を輩出し、これに加えて修養館の位置が藩校文武館の存在した旧地の一角にあるところから、修養館を改めて文武館と称するに至ったのである。

ところが、文武館開館式を九月一日挙行することになり、小田原町立第三小学校教室(現スポーツ会館の所)で柔道大会を催し、校庭にテントを張って模擬店を設け多数の招待者の参集を得たが、大会競技の最中に関東大震災に遭い、校舎倒壊して大混乱に陥ったが、文武館の道場は幸に破損をまぬかれて無事だった。

文武館再建

震災直後、館は済生会の診療所として使用され、また学校の教室としても使用させられたが、次いで小学校再建のために館は取壊しとなったので小田原町当局と交渉の結果、当時新名女学校(旭丘高校の前身校)の校跡にあった町会議員会議所を譲りうけて道場をここに移転した。ところが、間もなく大正十四年二五五に至り新名女学校新築のため土地明渡し¹の要求を受け、半年の間道場を城内高校建設作業所の大工小屋に移したが、相模学園小田原商業学校(現小田原スポーツ会館の所)北側隣接地に移築されることになった

ので、またここに移り、昭和十年二五五八月まで十年間をこの道場に落ちついて修業することができた。

しかし、昭和十年八月、相模学園小田原商業から、運動場が狭いので文武館敷地を借用したいという請願を受けたため、町当局を接洽し、町有地(現本町一―十二―三〇)の借用を許可され、またまた移転することになった。

新道場の建設に当っては小田原地方の文武修練の殿堂として恒久的価値あるものを新築しようということ、関係者一同その建設計画に非常な苦心をほらい、寄付金を募って遂にその目的を達成したのであった。

- 一、建物及坪数 木造平屋ス レート葺七十六坪二合三勺
 - 二、起工年月日 昭和十一年八月三日
 - 三、竣工年月日 昭和十一年九月二十五日
 - 四、建築費 総額 四〇一〇〇〇七銭
- 初代館長には金野房雄、副館長に近藤磯平就任し、柔道部長山橋勝蔵、剣道部長²数納政治郎、柔道師範半田義磨七段、剣道君塚栄吉教士で、十月一日から新装成った道場で稽古を開始したが、開館披露は翌十二年五月二十八日に行った。

文武館では従来柔道修業のみを行っていたが、この新築の時から剣道が加えられたのであった。

市移管以後

小田原が市制を施行したのは昭和十五年十二月二十日(二五〇)のことであるが、この記念すべき年に当って文武館を市に寄付することになり、市制施行の日より市営文武館として出発した。

小田原市移管となってからの館の運営は順調にすすんでいったが、太平洋戦争が逼迫してきた昭和十九年(二五四)道場は小田原に駐屯する軍の宿舎として使用されたため、一時新玉国民学校の講堂へ移転することになった。

スポーツ会館上席の大太鼓のきず跡は、昭和二十年八月十三日の米軍艦載機による爆撃の際、吹きとばされてきたものである。

戦後復活より閉館まで

太平洋戦争が終結して米軍進駐が行われると間もなく武道稽古中止命令の通達が出て、学校柔道は禁止されたが何故か民間柔道はこの規制からはずれていたようである。

戦後の荒廃した世相のなか、戦地より復員してきた諸先輩が自発的に稽古を再開、柔道を求めて集った近隣の青少年で道場は活況を呈してきた。

食糧不足にあえいでいた昭和二十一年の春には、軍国主義的な武道から脱皮して、平和日本の新たな武道として力強く復活したのである。

日中は授産所として使用されていたので、練習の前に落された縫針を拾い、ぼろぼろになった畳を置き換えながらの稽古だった。

古畳のいたみがげしく、乱取りが終ると毎晩竹箒ではいて道場の前でひと山になったわらを燃したり、市のはたらきかけで足柄小学校にあった旧軍隊の使っていた畳を斡旋してもらい先輩たちが牛車に積み込んで運んだこともあった。この畳も座敷用であつたため寿命もさして永くなく金野館長のはからいで市内の企業、事業所などから寄付金を募り東京の業者から新しい畳を購入、先輩たちはトラックの荷台にのって運んできたという。

文武館の歴史の陰には、名はおもてに出なくとも苦難を克服しながら館を支えてきた諸先輩の苦勞があつたことを忘れてはならない。

しばらくして、授産場は他へ移り、剣道が復活、空手の稽古もはじまった。剣道の錬成のない日は、剣道場いっばいに畳を敷き、柔道の稽古のない時は、

柔道場から竹刀の打ち合う音が響いた。

昭和二十六年(二六三)、武道禁止令が解かれる頃には、乱取りをやる場所を取り合うくらいだった。気が藤棚までほとぼり、館内いっぱいには若人の熱気が満ち溢れていた。

名誉師範に講道館から高垣信造九段を迎え、文武館は名実共に城下町小田原の武道錬成道場として、その大きな役割を果してきた。

頌徳碑文

文学博士・竹添進一郎先生は、大矢野町大字上馬場の医師・小田順左衛門と二神家出の美加の一子として、天保十三年(二八三)に出生。幼少より学を好み、三歳にして経書を朗読し、神童の誉れ高く、当年十五歳熊本に出て木下韓村塾に入門。天性の学才は冴え、井上毅らと木下門下の四天王と稱さる。二十二歳のとき細川藩に士分として召し出され時習館訓導を勤める。二十七歳、藩命により京都、奥州、江戸を探訪する。時に江戸では時の英傑・勝海舟を訪ね、国家大経を論じその見識の深さに海舟を驚かしめ、以後親しく交わる。明治四年廃藩置県となるや、先生は城下寺原瀬戸坂に開塾、転じて現玉名市伊倉町に遜志斎を開き子弟の訓育にあたる。名を慕い学ぶ者が多かった。八年塾を閉じて上京、勝海舟と再会し、海舟らの推

寒風吹き荒ぶ夜、稽古衣一枚で取り組む若人を道行く人がしばし足を止め眺めていた姿は、城下町小田原の懐しい風物詩でもあった。

昭和五十五年(二九〇)スポーツ会館へ移転のため解体され、現在「箱根口門跡」として建物のあった場所は歴史保存をされているが、明治、大正、昭和と激動の時代に君臨した武道の殿堂としてなんとか保存できなかったものか、今もって悔まれる限

挙により特命全権公使森有禮(もりあり)の随員として清国に渡る。次いで中国大陸中部以北の奥地を踏破し、名著「稜雲峡雨日記並詩章」を著し、日本国内はおろか中国文人等の絶賛を受けた。明治十三年より清国天津領事、朝鮮弁理公使を歴任し、明治十八年朝鮮弁理公使を退任、引き続き無任所弁理公使として在任中、時の文部大臣・井上毅の要請により、明治二十六年十月東京帝国大学教授に就任。明治二十八年(五十四歳)退官し、同年相州小田原に閑居、かねて念願の読書著作に専念。二十余年をかけての大作《左氏会箋》により帝国学士院賞と文学博士の称号を授かる。明治三十五年皇太子嘉仁殿下(大正天皇)を小田原に迎え拜謁、その夜、特に召されて前席講演をなし、書を親覧に供したことは特筆すべきである。又先生の次女須磨子は、講道館柔道の始祖・嘉納治五郎に

りである。

老朽化のためとはいえ、昭和の貴重な木造建築として、また先輩たちの労苦に報いるためにも。明治四十年を創立元年とすれば、閉館まで七十二年間、市民に愛され親しまれてきたことになる。

長い風雪に耐え、歴史の年輪を刻んだ文武館の扁額と大太鼓は、今日なおスポーツ会館の白壁を背に過ぎし日々をふり返

嫁ぎ、その長男履信が竹添家を継いでいる。大正六年三月三十一日、七十六年の生涯を全うし、政府より従三位勲三等を贈られた。熊本県教育委員会は昭和二十九年近代文化功労者として顕彰し、その賞状末記に「天下の碩学と稱せらるるに至ったことは、洵に後進を奮起せしむるものである」と記してある。先生逝き八十年、恰も世情混沌たるこの時、先輩諸賢の意思を継承し、先生の遺訓と遺徳を偲ぶよすがとして内外の有志の賛同と協力を得て、茲に頌徳碑の完成を見るに至ったことは誠に意義深いものがあり、望外の慶びとするところである。

(川上昭一郎記す)

平成十年三月七日

竹添進一郎先生顕彰碑建立期成会

会長 何川一幸

り、先達たちの足跡を静かに語りかけている。

文武館の前身、修養館の命名の由来を解明すべく訪れた講道館で、竹添進一郎先生を偲ぶ追悼の記念誌に触れ、明治の激動期文人外交官として活躍された先生のご遺徳をはじめ知るところとなった。

平成元年(二六五)小田原文芸愛好会発行の『小田原文芸案内』で元小田原高校で国語の教鞭を執られた小泉重義先生が、竹添先生についての事績を解説されているが、今日まで目を通すことなく過してきた。

平成八年(二九三)七月、大矢野町の郷土史研修同好会で竹添先生の菩提寺、東京小石川音羽護国寺への墓参のあと、先生ゆかりの地、小田原へ立ち寄り、図書館で進一郎の遺墨を鑑賞されたとのこと。相前後して生誕の地、大矢野町では顕彰碑建立の気運が盛り上がり、没後八十年を記念して竹添進一郎先生顕彰碑が平成十年(二九六)三月七日に完成、胸像台座横の御影石表面に先生の偉業を永く後世に伝承すべく「頌徳碑文」として彫り込まれることになった。碑文をここに紹介し、改めて先生の偉功を顕彰し、その遺徳を偲びたいと思う。(おわり)

小田原駅西口方面の写真をみて

石綿 勉

下の写真は、東海道新幹線工事直前の昭和三十七年あたりと思う、西口の駅舎風景です。変貌必至とみられたこの地をへ唯一人歩く場面をとらえて、意義深い写真とうけとりました。

その1。唯一人を通して、利用者の少ない当時の駅前を表現したように見えます。

その2。心淋しい、閑散した駅前を捉えています。駅舎と唯一人が目立ち、自動車や自転車などの乗り物や、集散する人物が見えませんが、集散する動きのある東口駅前とは、正反対の画面です。これが西口駅前の特徴とみなして、写しとりひき出したように思えます。

その3。写真の左端に見える物に、工事の跡形を思いました。そこで地図(後掲)をみると、この地はへ切崩地、材料オキバ(ン)になっていました。すると写真の人物は、材料置場脇を唯一人歩む姿といえて、そこは切崩地でしたと読めます。

その4。唯一人が歩く方



▲現在の西口広場風景

向は北西、すなわち谷津・城山・荻窪方面です。この地の将来性、つまり発展するであろう展望を、唯一人の歩む方向で暗示しているかのようです。切崩地、いわゆる開発地を歩む姿は、地域発展を告げるメッセンジャーにみえます。

また、西口駅舎の原点ともいえる写真です。今の発展を際立てて、効果一入(ひとしほ)です。昔を思い



▲取り壊される直前の西口駅舎(昭和37年頃)

広報「小田原」より



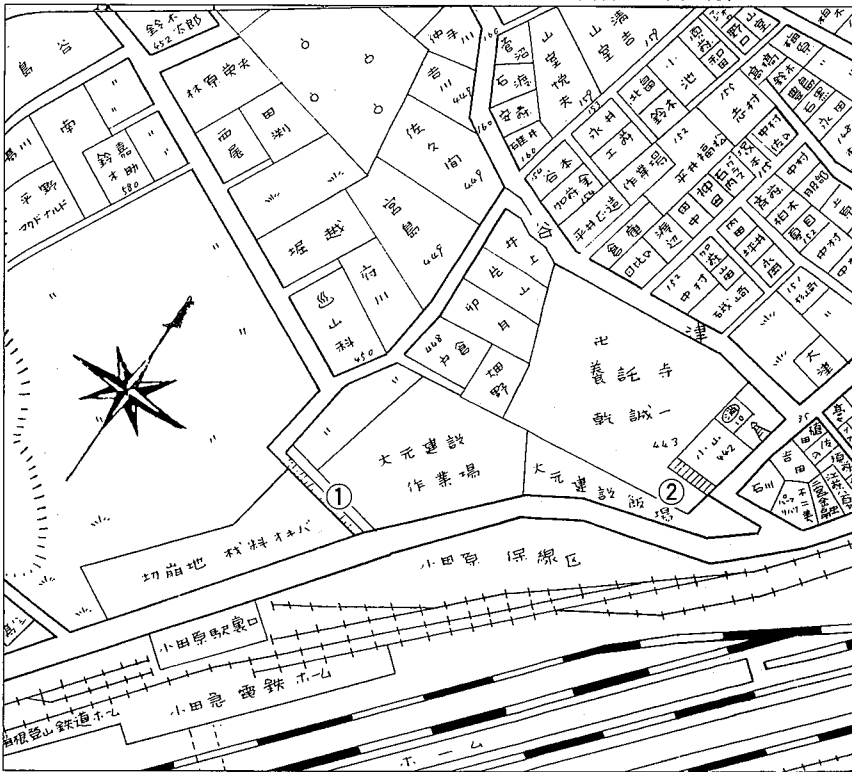
出す寄るべにもなり有益です。
〔終戦直後の様子〕

平井亀之助さん
(六十八歳)の話。
西口近くに居

住する平井さんは、左の写真を見

見て、
「終戦直後の西口は、こんなに
広か無えよ。駅を出ると、山(愛宕山)が迫ってた。目の前は、
崖と石垣だったんだから。
これ(写真)を見ると、結構広

▼昭和34年頃の西口、大福荷神社方面の明細地図(昭和35年発行)



くなくなってるから、山を相当切り崩しているよ。崖があった時だと、駅は隠れて見え無えよ。崖(約十五メートル)は駅より高かった。

この崖には、防空壕があった。入口と出口の穴があつて、通り抜けられるようになってた。

下の写真⑤の所の黒くみえる線は道路で、地図のこの所①。途中に階段があつて、上つて高

台に出た。愛宕山だよ。」

この頃の西口駅前を知らない人には、ためになった話でした。「山の切り崩し」は、新幹線工事や、西口駅前広場整備事業、連絡道路造成等が思われます。

これらの工事によって西口の愛宕山は削平されて、周辺の土地並のレベルとなり、山容消滅となりました。新幹線に呑みこまれた愛宕山という風情です。

〈遠望〉

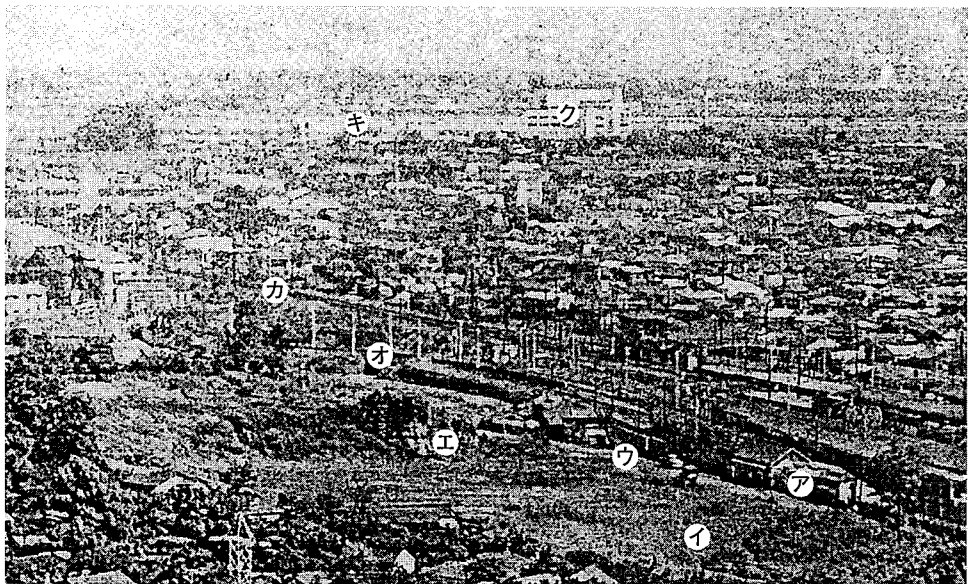
前ページ、下の写真の原形にあった校舎全景の風景から、この上の高い地所から撮ったものと思いました。

駅舎⑦の前方①に、切り崩し地の展開がみられます。道路⑨が、写真右側では見えません。高さがあるから見えない、故になだらかな坂を思い、削平中の⑧の所と想つた次第です。

⑤の黒線は道路で、上の方に階段があつたということです。

④は小田急線、⑦は東海道線です。線路の延長線が、よく見えていた時代でした。

酒匂川⑤も見えた時代でした。「大正小田原万華鏡」高田勲泉著の中にも、小田原駅付近の切り通しから、酒匂川鉄橋が見えた旨が載っています。「酒匂川ま



▲昭和37年頃の西口風景と遠望

城山中学校37年度アルバム的一部分

での遠い距離が、こんなに間近いとは」と驚いて眺めたという高田さんでした。

⑦は、当時のハリスガムの工場(現カネボウKK)です。高田さん流に、間近に見えました。新幹線敷設以前の景観を伝える貴重な写真とみました。

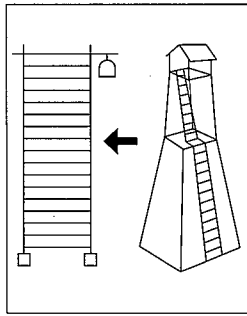
酒匂川⑤も見えた時代でした。「大正小田原万華鏡」高田勲泉著の中にも、小田原駅付近の切り通しから、酒匂川鉄橋が見えた旨が載っています。「酒匂川ま

〔旧養託寺付近〕

平井さんの話が続きます。

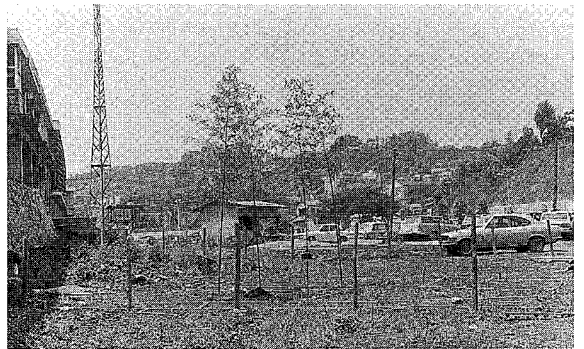
「養託寺(新幹線工事で移転)は高台にあって、階段(前述の地図②)をのぼっていった。墓地は駅よりにあった。お寺のまわりに大きな樺や桜などが茂って、うっそうとしていて、夜通るのこわかった。

家の前の土手(養託寺土手)にも防空壕があって、空襲警報のたびによく入った。間口一メートル八十ぐらい、奥行き十メートルほどあったと思う。艦載機がよくきて、駅が撃たれた。火の見櫓が養託寺の前にあった。屋根がついて、おどり場ではしごを中つぎしていた。そして丸太柱の火の見櫓に替わった(次の絵図を描いてくれました)



私の家から愛宕山をみると、二段のように見えた。上にいくほど高くなっていた。こうした中に畑があり、家があった。」以上の話は、昭和二十年代の、西口景観を伝えていました。右下の写真は養託寺の旧地で、昭和四十六年頃ということですが、

▼発展する寸前の駅前の空間 (昭和46年頃)



左側に新幹線ホーム裏側が、右側に愛宕山を切り崩した断面と下部の石垣が見えます。この空間は、前述の階段つきの道路②も入っており、この丘陵は消滅して平地化されています。平井さんのいう「駅を出ると山(愛宕山)が迫っていた」状況は、改善されています。この写真は、西口開発の合間をとらえて傑作です。

そして、空間にかつての愛宕山という見方に誘われた写真でした。その様子は、今の小田原駅を通り越して、北条氏政、氏照墓地周辺まで延びた丘陵で、幻想の愛宕山です。へ小田原駅発展に献身した愛宕山が見えかくれていました。

〔谷津方面の様子〕



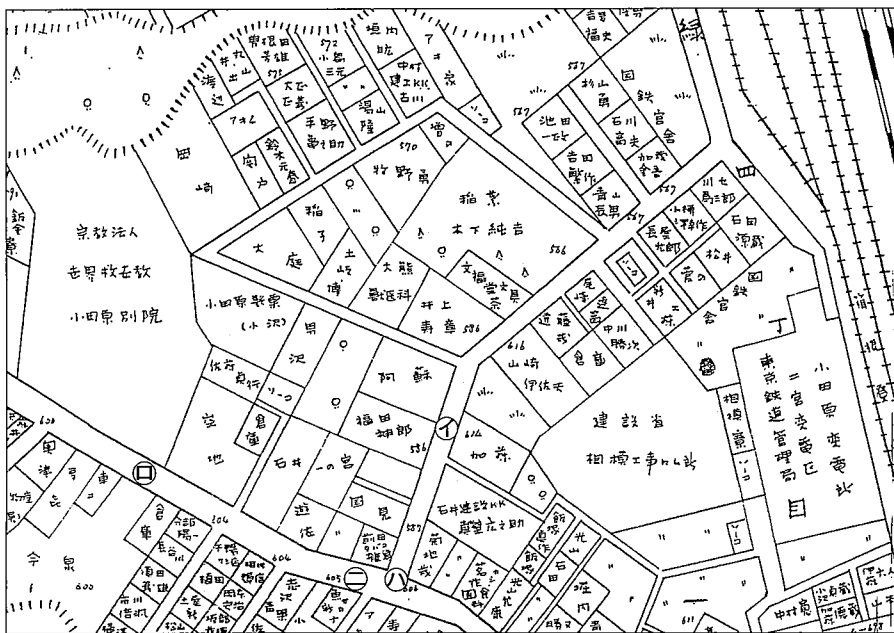
植邑輝子さん (七十八歳)の話 魚新商店祖母。

「西口を出ると、すぐぶつかるように土手があった。高い土手だった(約十五メートル)。今の道路ぞいの土手ぐらいあった。この上に畑や家があった。

この土手は、大稻荷さん側の方が高めで、谷津側の方が低めだった。裏駅は山だったんだから、開けた余地がなかった。駅からの道は、この道①だけだった。

青橋の方からきて、荻窪の方へ行く道②とぶつかった所に、前田商店があった。③に、初代の魚新があった。人が集まる一

等地だった。私が越してきた昭和二十三年頃は、お店はこの一軒だけで、後は仕舞屋だった。配給の物は、駅前のお店で買った。きゅうりなど野菜は、競馬場跡の畑から買った。いなかだった。新幹線の駅や、道路ができて開けた。夢のようだよ。(おわり)



▲昭和34年頃の西口、谷津方面の明細地図 (昭和35年発行)

小田原映画文化シリーズ①

私のキネマ劇場五十年(川口啓介さんに聞く)

しはこちらに来たんです。それでも行き来してやってましたよ。

青木良一

御殿場線が東海道線と言われていた頃

あたしは支配人の川口啓介です。拝啓の「啓」を書きます。昭和十年八月生まれで、ここに入って五十年と五ヶ月になります。オリオン座が旧館で三十三年、新館で二十四年合わせて五十七年だから、ほとんどオリオン座の歴史と同じです。

川口さんは、昭和十年青島生まれ。秦野の専売公社に勤め中国に米葉を買い付けに行っていた父・喜太郎さんが馬賊に金庫を狙われてピストルで七発撃たれて殉職したときは数えの四つ。母子五人で昭和十三年に引揚げた。親戚の者に、「きいっちゃんのお葬式のお供物を喰った子かよ。大きくなったな」といつまでも言われていたそうです。小田原駅近くの、今の「音羽」のところに少し居て、昭和十八年に新玉(今の浜町)に転居された。

オリオン座に入ったきつかけですか。昭和二十六年に社長の石井康之助さんの家に遊びに行つて、それで国府津(ロマンス座)の話が出て、たまたま冗談に出たのを本気にして、それが始まりだったんです。あたしは今の社長の基雄さんの遊び相手だった。昭和三十三年頃、国府津に行つて三四年やって、先代の康之助さんの弟の専之助さんが向こうをやるようになって、あた

には国府津には機関区もあつて、映画館も御国座があつた。移動映写で十六ミリに近いようなものがあつて、今日は映画あしたは歌舞伎というようにやつていたんですよ。映画ばかりじゃなかつたんです。下曾我は柳田さんに聞くといいです。松田は金時座、山北は中央劇場がありましたね。東宝のことは山崎さんですね。あの人が詳しい。

あたしは、昭和二十一年から二十七年頃までは、聞いたことをお話しします。

昭和二十一年の二月にオリオン座がオープンしたんです。裏の鮑屋の市川さん、だるまの広沢さん、箱根口の茶碗屋の江島さん。あと、報徳綿の、うぐん、すつと出ないな。報徳綿の井上さんだ。それと山北の、名前は忘れたが材木屋さん。これらの有志が、物資のないときに持ち寄りで建てたんですよ。発起人は鮑屋さんです。

*「鮑屋の市川さん」は市川敬太郎さん(二六〇〇元迄)。「だるまの広沢さん」はその実弟の広沢吉蔵さん、「箱根口の茶碗屋の江島さん」は、いとこの岩田忠介さん(市川孝夫さんの話)。

この土地は石井康之助さんの父の常吉さんのものであつたのを康之助さんが受け継いで、それを鮑屋さんが代表で借り受けて

建てたんです。常吉さんの実家は千葉で、松竹・旧日活の専務だったんです。東京で三十五館くらいやっていたが戦争で全部なくなつて、残つたのはここだけ。それを受け継いだのが康之助さん。

康之助さんは大正三年の東京生まれで、片岡千恵蔵の「千恵プロ」に預けられて京都に行つて映画の修業をしたそうです。

むかし、ここには芝居小屋の吾妻座があつて、終戦で何もなかつたからここで始めたんでしょう。建てたのは津山さん。間中病院の裏の津山建設です。二階が百席、下が二百四十五席。間口八間、奥行きはその倍です。写真をみてわかるように、歌舞伎座のような外観です。

それから、昭和二十五年に鮑屋さんが映画興行には素人だから興行は出来ないというので、石井康之助さんがオリオン座の建物を買取ったわけです。昭和二十五年は康之助さんの、いくつになる。三十六歳か。当時で百万円と言っていました。今はふつう劇場を建てるのに一億です。

戦後初めの配給は、小田原では東宝館が東宝・新東宝、復興館が大映、富貴座が松竹で、洋画を封切るところがなくて、オリオン座は洋画をやつたんです。

それ以後二転三転して、うちが松竹と縁を持ったのは岡田茉莉子の『愛染かつら』(田中絹代のリメイク版)からです。

配給会社と劇場の関係は金銭だけではなくて、この世界は義理もあれば人情もある世界でね。そういう時代があつたんです。

最盛期はどうかって。当時の代表作は、

まず『君の名は』、そして『榎山節考』『喜びも悲しみも幾歳月』でした。有名な女優といえば田中絹代、男では佐田啓二だった。正月は伴淳・アチャコの『二等兵物語』が当たっていました。

うちは三百四十五席で、最盛期の昭和三十四年頃には平日の平均が千五百人くらい、土日は三千人くらい。うちで一番の時は三千七百入って立ち見席でも観てもらった。『君の名は』のときは毎日三千人。入ったなあ。

儲かったか。いや、当時は単価が安かったから入れば入っただけ配給会社に持って行かれてしまった。「特料」といって、ふつう百万のところをこ二百万持って行かれてしまうこともあった。

どの辺から見に来たか。小田原の劇場のシエアは、西は湯河原・箱根、北は山北・松田、東は国府津・二宮・秦野までありました。

東海道の封切りは、川崎・横浜そして小田原、箱根を越えて沼津・静岡で、そこらにまず配給するんです。そこから地方へ枝が広がっていく。

配給会社には、朝四時に小田原を発って六時に着いて、築地の松竹の倉庫に行くんです。魚の仕入れと一緒にズック背負ってね。ズックって知ってますか。帯の芯で出来たような袋です。これにフィルムを十卷から十二卷入れて、肩と手で持って来るんですよ。三十キロ以上あったな。当時は貫ですよ。何貫目になるか。二本立てだと肩にズシンときた。若いから持ってたんです。

伊豆の下田の方の人も、沼津に行くより

も東海道線に乗ってしまっただけでこっちへ来て小田原に下りて見に来てくれました。今までは三十万から三十五万の人をシエアにしてやってきましたよ。

小田原というところは平塚なんてよりも人を集める魅力があったんですね。当時は宮小路や新開地(新地って言ってましたけどね)に行くのを楽しみにしていたんですよ。最盛期は、映画を見に来る人の年齢は老若男女いろいろ。年齢は「ぐちゃぐちゃ」。ハハ、子供から大人までですよ。

あたしの田舎は松田の柳だったんですけどね、着飾って「これから小田原行って映画を見て来るんだ」とかね、「芝居を見にいつてくるんだ」と言っていました。山坂下って一時間かけて松田まで下りてくるんですよ。当時は、「小田原行くよ」と言えば町へ行くことで特別の日だった。そして、帰ってきたあの映画はどうだった、こうだったと、しばらくの話題にしていました。

ライバルですか。ライバルはやはり中央劇場ですね。あそこは富貴座が火事で燃えて洋画になったんです。

当時小田原では「一本一館」だったから競争だった。しかしね、「E.T」(スピルバグ監督作品)のとき、「拡大」(上映劇場数を増やすこと)でオリオン座と中央劇場の二館でやれと(ある)



川口啓介さん

配給会社

が言ってきたから、うちは断ったんだ。そんな「一本二館」では面白くないからね。昭和五十八年に「南極物語」が大当たりしてね。このときは、これに「ユナイトのダブル・オー・セブン」と「松竹の寅さん」が夏休みにあってね。どっちをとるか、うちは二本立ての方をとったところ、これが最初で最後の不覚ですよ。南極物語は中央劇場でやった。そう、指をくわえて見てたってわけですよ。

小田原というところは宣伝媒体がないところですよ。新聞でも放送でもこちらが思うようなものがないんです。地元の新聞は部数が少ないし、当時は地元のラジオ・テレビはない。一番いいのは通りにポスター出して見てもらうことですよ。『宇宙戦艦ヤマト』のときはこれが大変効果があった。一週間で仕込んで、七百枚看板出して、興行が成功したんです。

劇場にはテケツ(チケット売場)が二人、もぎりが二人、映写技師が三人、宣伝が三人います。宣伝は看板張りです。看板描きは大岡さんです。良次さん。もと陸軍中尉で今は九十歳を越えています。

派手なものも作りました。『喜びも悲しみも幾歳月』のときには表に灯台作ってピカピカやったものです。あの『ジョーズ』のときにはね、大きな口のところからお客さんを入れましたよ。

むかしは、映画は音から入ってきたんです。どういうことかという、ラジオやテレビで主題歌を覚えてね、それで小田原に映画が来ると、「行ってみようか」となったんです。今はそうじゃありませんよ。

映画をやって何がおもしろいかって。格好良く言えば、映画は感動を分け合うんですね。「よかったよ」、この映画」って言われるとホッとします。持つてきてよかったという気になる。これですよ。

映画は言ってみれば麻薬です。一度見たら二度三度見たくなるんです。それほど魅力のあるものです。家でビデオを見るのと違って、劇場に来なければ味わえないものがあるんですよ。

今ねえ、「いい映画ですね。でも映画を見に来る時間がない」という人がいますが、でも映画はたった二時間ですよ。二時間くらい「おれは居ねえぞ」と言つて家を出てくるんですよ。そうすれば見れますよ。

何、面白い話をしてくれ。毎日一つ幾らで売るのも商売だけど、うちのはそうじゃなくて、当たるか外れるか漁師みたいなものです。しかしね、土地の漁師は、「お前たちはいい、人間いるじゃねえか。おれなんか魚いるかいねえかわからねえ」って言つ

てました。

またね、「私は水商売ですよ」というと、「おれたちが本当の水商売だ」って冗談言つてました。

そしてね、松原神社の大祭は一月十五日が四月十五日になり、それが五月五日になつてしまつたが、「一月十五日にやつていればずーと鰯いわしがとれていたんだ。そうすりゃあ一月の寒鰯むせを上げてりゃあいいものを、四月の鰯いわしがわくようなものを上げるんだから鰯いわしがとれなくなつたんだ」って言つてます。

今の館は一階がレッドホール、二階がイエローホール、三階がブルーホールで、本町小学校で先生が「赤・青・黄色は何ですか」と聞いたら、手を挙げて「オリオン座です」と答えた子がいたという一つ話もあります。いい思い出です。

姿見の老いて母似の秋裕

植松テル子

作者は俳誌「朝」の同人である。右の句、一読して姿見に映る作者の何気ない姿が彷彿として目に浮ぶ。若い頃から毎日馴れ親しんできた姿見に、ある日ふつと自分の顔、容姿までが母に似てきたと感じ胸が熱くなるのである。年を加える毎にその思いは切実であろう。

日常茶飯のひとつきを、母の思いにふける作者の心が素直に表現されて、季語の秋裕がいっそう句を引き立てて品のある作品となった。

(剣持芳枝)

ありましたね。

最後は外資系によるシネコン支配になつたんです。ワーナーマイカという会社です。その第一号店が今から十二・三年前に海老名に出来たんです。それから茅ヶ崎・大阪・九州と全国的に流れが出来たんですね。小田原では鴨宮にパージンシネマが出来てこういう結果になつたんです。時代の流れかなあ。

今までのお客さんですか。この間も、「パージンシネマに見に行くのに足代入れて一回五千円かかるよ。やめなさい」と言われました。年寄りや子供一人では鴨宮に行くのに大変なんではないか。川(酒匂川)からこちら側の、ちよつと時間があるからといって安直に見に来る人は、これからもうそれが出来なくなつた。申し訳ないなという気持ちが残りますよ。

あたしですか。何らかの私たちで業界に残りたいと思つています。ハハハ、死ぬまで業界にいますよ。

結局、映画が好きなんです。映画は見て楽しみ、あたしの場合さらには(興行を)かけて儲かって楽しむ。また、損をした苦労もある。波が激しい業界だけに、面白かつたなと思えますよ。

ええ、オリオン座は八月の二十日でお終いです。あたしも九月にはもうここにはいません。

(閉館となるときいて伺つたが、終始明るいうち調であったのは川口さんのお人柄であろう。映画盛んなりし頃のお話には思わず釣り込まれ、「聞き入る楽しみ」を実感させていただきました。長時間のお話ありがとうございました。)(おわり)

昭和三十四年が映画業界のピークだった。赤線が終わりになつたのと同じですよ。テレビが二十八年に出て、それが普及すると映画が悪くなる。それから映画は斜陽産業になつてしまつた。なかには多少の当たりがありましたがね。次いでビデオが出て減り、またそのあとに映画がテレビで見れるようになって減り、振り返つてこういう大きな波が三つ

小田原映画文化シリーズ②

霧の中の御国座

江戸民具街道

おもしろ体験博物館長(中井町)

(絵と文) 秋澤達雄

風の吹き抜ける黄昏時、酒匂村の方から帰るフレ太鼓の音が流れてくる。森戸川をまたぐ親木橋を渡る頃、周辺の子供達の何人かが、なんとなく寄り、時にはぞろぞろとその後にくっついて、歩いたものでございませぬ。

幟旗をはためかせた小さなリヤカーに大太鼓を乗せ、「せむしの幸ちゃん」と親しみを込めて呼ばれていたところの、がっちりとした体つきでありながら子供達と変わらぬ背丈のおじさんが、印半纏をひるがえしながら時々打ち鳴らす。

天神さんへ行く御殿場道の入口までついていつた子供達も、あと少し行くと御国座でありながら、電気の光でほんのりと明るい夕暮れ時は、東角のお菓子屋の先へ行くことが他所へ踏み込む様な気がして、うちへ向って散らかったものです。

今の鈴木歯科医院の場所にあった御国座は、西隣が艶やかな感じのする下田呉服店であり、東隣が松木金物店、更に今

もある魚伊佐です。

少し広場があつて、幟旗はためき、きらびやかなポスターが貼られ、活動写真がかかる時にはむき出しの黒い大きなスピーカーから音楽が流れ、その一角が何となく華やいで見えたものです。

五年生の時です。大東亜戦争が始まる頃には、チャンバラ映画もあつて、たまに連れていかれてもらいました。時期は定かではありませんが『風の又三郎』や阪妻が主演する『無法松の一生』も、ここで見たような気がしています。

入口左側に切符を売る小窓があり、右側には下足溜りがあつて、下足番の出す札と引き換えに自分の履物を渡すのです。中は畳敷きの広間です。左側は二段ばかり下がった廊下でした。スノコ板が敷き並べてあり半分は土間で、楽屋とおぼしき奥の方やトイレに行かれるのです。右側は芝居小屋の面影がまざまざと残された棧敷席です。一段高くなつた畳一帖分六尺幅の細

長い席で、段違いの境には、ちょいとした手すりはずつと続き、年寄りが肘をついて顎を乗せたり、腕組みをして寄つかかっている姿が見られました。芝居小屋当時は特別席であつた様が、子供心にも感じ取れたものです。

右側にある二階への階段前にお菓子や飲み物を商つている場所があり、買つてもらつた時の嬉しさはまた格別のもののでした。二階席の記憶が全く無いので、上がったことが無かつたのかも知れません。

時折御国座の前を通ると、太鼓を打ち鳴らすおじさんがポスターを貼り替えたり、幟旗を出し入れしたり、掃除をしている姿がありました。うちの手伝いで魚伊佐へやらされた時です。帳場の端に腰掛けた幸ちゃんやおじさんが、昔の大きな竹輪をかじっているところへ出つくわして、驚いたことがございませぬ。

「おめー(お前)、よくてつでー(手伝い)すんなー、立派なもんだ、感心すらあ。」

と言われた事がありました。おっかない顔つきでしたが、子供達には優しい人でした。芝居小屋の奥の方に住んでいるらしいことしか知らなかつたのです。

中学生の頃驚いた事には、子

供でもなく大人でもない『中人』という料金がありました。小田原の常設映画館へ行くようになって、そんな料金はどこにも無いことを知って不思議な気がしたものです。

映画がハネ(終わった)帰りに、下田呉服店の前に出ているトモセのおでんの屋台で、こんにゃくの大きな味噌田楽を買つてもらつた記憶は鮮烈です。太い竹串に刺された三角の厚い大きなこんにゃくが、おでん鍋から引き上げられ、白い布の上で水気を拭き取り、横に置かれた味噌がめの中にドボリとくぐらせて持たせてくれる。体の大きなおばさんのその手早さ、もうもうたる湯気の中から「着物にかけないように食べんだよー」とかける声の温かさ。食いもん(食べ物)のことに絡まると、いつまでも忘れないものでございませぬ。熱いのをかじりながら帰つたのも、走馬灯のような淡い光の中に心楽しく浮かびます。(おわり)



小田原叢談

(四十五)

石井富之助

小田原と落語

東大落語会編の『落語事典』を見ると、小田原、箱根を舞台とする落語がいくつもある。「三人旅」「小間物屋政談」「盃の殿様」「抜け雀」「宿屋の仇討」「しじみ売り」などである。

「三人旅」の中の「鶴屋善兵衛」というのは、気散じな旅に出た三人が小田原の鶴屋善兵衛という宿屋に泊まる。一人が飯の前に風呂に入りたといつて、はいって来る。「なんだ早いな。」「でもいい湯だ。夕べの宿はひざごぞうまでしか湯がなかったろう。きょうは肩まであるからなあ。」「そいつはいい。」「そのかわり入りかたがむずかしい。」「どういふふうにへえるだ。」「さかさへえるのよ」という話。

「おしくら」というのはこれに続く話で、「おしくら」は小田原の方言で「だるま」という売女である。これと呼ぶが、そのうち一人が年よりの比丘尼で、

なにやかやあつて翌朝宿を立つ時、ほかの二人はそれぞれの女に髪油でも買えといつて小遣いをやる。お前もやれといわれてしかたなく、「こりや少ねえが、お前にやるから油でも買って頭へ……といつても毛がねえなじゃ油でも買って仏壇に灯明でもあげてくんねえ。」と落とす話である。

「小間物屋政談」は「大岡政談」の一つで、これも小田原の宿屋が舞台になっているが、どれもこれも小田原でなければならぬというほどの特色はない。

ところが「抜け雀」(別名雀旅籠)はまことに小田原らしい落語になっている。聞けるものなら是非一度聞いて見たいものだと思つていたら、NHKの落語特選で金原亭馬生が

やってくれた。「落語事典」にもそのあらましが載っているが、馬生の話とつきまぜて紹介しよう。

みなりのみすばらしい旅人が夕暮時に小田原宿に着いたが、どの宿も呼んでくれない。宿を通り越して夜になってしまった。こんなに暗くなればみなりもわからないだろうからと引き返してみると、相模屋喜兵衛という宿屋の亭主に泊ってくれといわれる。行ってみるとこれはまたひどい宿屋である。先代までは小田原一の旅籠だったが、今ではすっかり落ちぶれたという。そこへ泊った旅人は朝から晩まで一升ずつ飲んで寝ていく。だんだん宿賃が心配になっ



み

カット 内田美枝子

てきてさいそくすると、「実は一文なしだ。宿賃のかたに、ついでに絵をかいやろう。」といつて、雀の絵をかき「買いたいという者があつてもわたしは帰ってくるまで売らな。」といつて上方へ出立した。ところが翌朝になって雨戸をくると、ついでの中から雀がバタバタと飛び出し、やがて帰ってくるついでの中へびたりとおさまつた。これが評判になり雀を見にくる客がふえ、宿屋は大繁盛となった。ある日、お忍びで大久保加賀守がお見えになり、「これは名画である。千両で余にゆずれ。」といわれたが約束があるので断ると、「その絵かきが来たらかならず知らせよ。」といつて帰った。これでまた評判が高くなり、建て増しをするほど繁盛した。またある日、六十二、三才の上品な武家がおとずれ、つくづくついでを見て、「このままはおつておくとこの雀は落ちる。外を飛びまわつてついでに帰ってきて、羽を休めるところがないからやがて疲れて死ぬ。」亭主はびつくりして、どうしたらよいかと聞くと、「よしよしとまり木をかいやろう。」といつて、その絵に鳥籠をかき添えて立ち去った。すると今度は抜け出た雀がすうつと鳥籠の中へ入つてとまり木で羽を休め

た。これをまた大久保侯がごらんになつて、「これは二千両の値打ちがある。」といったので、喜兵衛は大喜び、あの絵かきがきたら十分なもてなしをしなければ……と待っていると、ある日絵かきがりっぱな姿で訪ねてきた。喜兵衛は実はこれこれと鳥籠の話をする

と、絵かきはついたてをじつと見ていたが、両手をついて「不孝の罪はお許し下さいませよう」と泣いた。喜兵衛は不審に思つてわけを聞くと、「実はその老人はわたしの父だ。」という。喜兵衛は「あなたほどの名人になつたら不孝なことはいや亭主これが不孝でなくてなんだろう、現在の親を籠かきにした。」

鳥籠と人に乗せる籠とのしゃれがサゲになつている。

馬生師匠のはなしは、宿場のフニキをきめ細かにお出しながら、おもしろおかしく、しかも上品にまとめあげた逸品であつた。

幸い録音をとつてあるのでいつでもお聞かせできるが、何かの機会に馬生師匠をよんで一席話してもらつたらどうであるうか。

小田原に關係のある講談もいくつかある。まず宝井馬琴師の「曾我の仇討」はまことに当代一のもので、ことにその中の

「紋づくし」は聞いていてほれほれするものである。題名は今思い出せないが、飯泉観者の角力で雷電為右衛門が孝子の願いをいれて、大岩大五郎(?)を土俵の砂にうずめるという話。また浅田

兄弟の仇討をとり扱つた「文政曾我」などがあるが、それらについてはいづれ調べた上で紹介したいと思う。(つづく)

片岡日記 28

片岡永左衛門

大正十四年七月

一日 雨

横濱私立高等女学校校長、田沼太右衛門氏、久々ニテ面會。本年七十三ト聞ク。元ハ□林ニテ市會議長なとし、大元氣ナリしも、年ハ争レス衰色見ゆ。十時頃より大雨。午後一時四十分発ニテ帰宅。

二日 晴 在宅

三日 晴 出勤

四日 晴

本店ニ於ル株主委員會ニ出席。

五日 晴

豆州伊東吉田、村上京次郎老人孫ヲ連れ來ル。同人ハ妻細君ノ從兄七十四才ニテ耳甚タ遠し。身内も年々少クナリ、人恋し

き佩東京ヨリノ帰途立寄しト。老人の心理ハ皆同し。所蔵ノ品川弥次郎子ノ和歌の書幅ヲ贈りしニ大悦ニテ帰る。

六日 晴

午前八時發汽車ニ乗る。藤沢山預金者委員大會ニ出席、清野神奈川縣知事、井阪孝氏列席ニテ、関東銀行整理案発表、出席者ノ賛成ヲ得テ四時散會、七時帰宅。

七日 晴 出勤

夕刻より暮參、龍夫淳子も同行、尾崎二廻り帰宅。

八日 晴

本店ニ行き、戸塚銀行廻り四時帰。本日暑氣甚しく汽車中ハ、九拾三度。

九日 晴

預金者委員ト會談。

十日 雨寒し

今井に立寄。関氏新築披露ニ行き、二時帰宅。

十一日 曇

出勤、夕刻親一來る。

十二日 雨寒し

午後、親一帰京。

十三日 曇

不順にて寒し。

七月の中の三日に袷せ衣ぬ

着たき氣候そ雨ふらむとし

十六日 晴

出勤、暑氣ヲ増ス。

十七日 晴

出勤、二時帰宅。

十八日 晴

午後より預金者整理承諾ヲ得ル為メ、酒匂山王よ

新玉町ノ各戸ヲ往訪、七時帰宅。

十九日 朝雨、午前より晴、暑し

株主委員会ニ出席、七時帰宅。

廿日 晴

出勤、今日ヨリ行員三組トナリ、拙者ハ古新宿より宮前迄ノ預金者各自ニ交渉シ三時疲労シ帰宅セリ。

廿一日 晴

藤沢町清浄光寺ニテ、株主總會ニ出席、午後一時半開會。去月六日縣知事ト関東銀行整理ヲ懇請セシ横濱商業會議會頭及興信銀行頭取井阪孝氏同列ニテ預金者委員関銀重役ニ対シ日本銀行借入金ノ内ニ拾五万円ト預金三分八厘七毛ノ内切株主ハ払込額全部ヲ欠損シ別ニ新規ニ資本金百万円ノ銀行新設ノ整理案ヲ発表セラレ、出席者ハ意義無ク賛成ノ意ヲ表シ、其後順潮ニ進行。今日ハ藤澤山ニテ株主總會ヲ午後一時半ヨリ開會、議案全部ヲ承認シ新銀行設立共一切ノ

整理ヲ井阪氏ニ懇請ヲ可決シ三時半散會。六時帰宅。是ニテ難関モ五分通り経過シ一安心となれり。

廿二日 晴

暑氣甚シ。銀行ニ立寄、行員ト方面ヲ分担シ、預金者ノ承諾ニ廻リシニ、特ニ詰問する者も無く返而氣毒ノ至リ、山本鶴吉氏等も早速承認して日仕拂停止ニ対テハ、預金者の不穩なる普通の事なるに他ハ不知るも、當地ハ

廿三日 雨

案外の平穩にて只々貴殿ニ対シ御氣毒と申を聞のみ。是ハ全く貴殿の人望ニ依る事と敬服すと、其當否ハ別として実ニ涙ぐまじき感もす。尾崎ニ寄り同行の行員と中食し、警察署ニ寄り成行を報告し帰宅。

廿四日 晴

銀行ニ立寄、郡長面會、預金者等の近況ヲ談話し又預金者ヲ訪問するに多ハ雨中御苦勞との挨拶にて恐縮。二時帰宅。

半減ト云不況ニテ、此暑氣ニモ不拘氷も不売なりと、盛況時代ハ藝奴の仕入も平均一人千円位にて出稼人も少く、抱入にも困難なりしに、世間の不況ニ随ヒ目下ハ六七百円となり希望人も多く、現下ハ増加して百五十人程の藝奴なるに、返而座敷数も少なく、當盆中にも其半数位の需用なりしと云も、他ニ姪売婦の所々に増かせしにもよるべし。

廿五日 晴

午後帰宅。龍夫、露木兄弟と三人明日キャンピングに箱根行の仕度ニ夜二入もにぎやか。當停車場も震災の修繕大部分出来一昨日より移転、震災後道路復旧拡張も遅々たりしも宮の前より北八町役場前通り迄、西ニハ箱根口迄出来、街燈も数ヲ増し、兎も角夕町ニ美観ヲ添ヘタリ。

廿六日 曇天

龍夫、天候氣遣ながら出発す。きんぴんぐ出掛る朝のくもり空

是ハ祖父の心なり

廿七日 曇天冷氣

此天候にてハと龍夫如何にと思ふ。今日も預金交渉ニ外出す。行員も各方面に運動さすにも困難なるハ総て其衝ニ當り人を當にせずとの決心より心身共ニ輕快トナリ、是迄ハ整理方針不定の為メ預金者の質問も確答をなし得されハ、心身共ニ萎靡し預金者株主ハ勿論何人ニも面接ヲ回避シタルニ、整理公表後ハ自然ニ攻勢ノ態度ニ傾き一層の勇氣ヲ増し交渉も進捗を覚ユ。夜に入りてハ、星も見ゆ。龍夫も喜び居るべし。祖母もよろこぶ。

二十八日 曇午後より晴

出勤。龍夫等箱根より帰る。心配せし雨にも逢さりしと。

二十九日 晴

出勤。龍夫等箱根より帰る。心配せし雨にも逢さりしと。

三十日 晴

午前五時より小八幡辺預

金者訪問、十時帰宅。親一東京より来り、六時帰宅。

三十一日 晴

細君淳子と三人福浦ニ墓参に行く。昨日命日なりしも、都合にて今日となす。流石海辺ハ風涼しく半日の避暑なり。帰途早川久翁寺閨の墓参し、五時帰宅。夜入り細君閨の待夜佛事に行く。

訃報

辻村宣明氏

扇町二二三一一〇

平成十五年七月十八日ご逝去。

享年六十四歳

小泉邦夫氏

鴨宮一七五

平成十五年九月二十日ご逝去。

享年八十三歳

謹んでお悔やみ申しあげます。



小田原提灯 ちようちん

その三

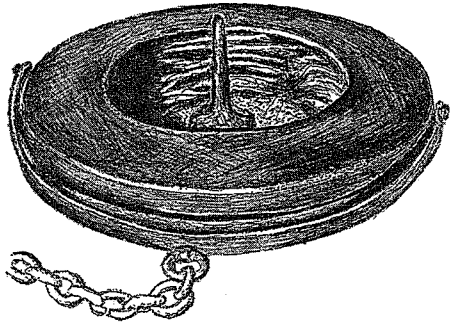
江戸民具街道

おもしろ体験博物館長(中井町)

(絵と文) 秋 沢 達 雄

究極の小田原提灯ではないかと言われているものです。広重描くところの五十三次でも名だたる宿場町藤沢に温存されていたものです。

言っている人達とは、古民具や古美術品をなりわいとしている方々、蒐集家、集めることは少ないものの機会がありますと手に取り、色・艶・手触りを楽しみ昔の道具を味わい惚ぶ、趣味人とも申すべき意外と多いところの人達なのです。天地の箱や蓋が真鍮(しん



幅9.5cm高さ25cm厚さ1.5cm (取っ手高さ 5cm)
民具街道あかり第三室 明治初期

原点的杉材から大幅なる進歩変遷と申しても良いのかどうか。時折、手に取って見ますと、初期の「強い味方とし

ちゆう」という材質から、明治に入つての物と思われれます。艶やかな竹作りのロウソク入れから下がる小さな信玄袋も江戸茶で染め上げられた小紋ともども愛くるしい物です。出てくる提灯がこれまたコンパクト。幅九・五センチ、厚さ一・五センチ、両の手にすっぽり納まる驚くべきものです。取っ手も厚みを減らすために上部ではなく上蓋の両サイドに付けられ、倒すと上蓋の横腹にぴたりと付く状態になり厚みに係わりが無い。更にロウソクを立てる芯の針に至っては、なんと、倒れるのです。江戸期に多く使用された扶箱(はさみばこ)の担ぐ木の柄から抜け落ちぬために付いているストッパーのかわりに付いているのです。知恵の粹(すい)と申すべきものでしょうか。

▼おもしろ体験博物館「江戸民具街道」は中井町久所四一八、☎(〇四六五)八一―五三三九。年中無休。

「かまどの上に祀る荒神さんみてえなもんさ、持ち運び出来る灯火(ともしび)は有難えもんだ、狸や狐は近寄れめえよ」などが思い浮かびます。自然に対する深い恐れや、火に向つての感謝の心が、「携帯便利な魔除け提灯」という概念からか、材質が何であれ、袂(たもと)提灯や懐(ふところ)提灯、更には中型の箱提灯までをも含めて、「小田原提灯」の呼び名に収斂(しゅうれん)していったのではないのでしょうか。

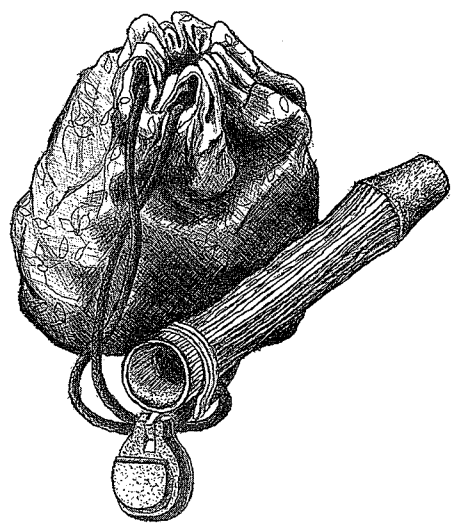


足利学校で地元ガイドの説明を聞く

第三回史跡めぐり速報

日時 九月二十七日(土)
行程 小田原駅↓佐野厄除大師↓足利学校・ばんな寺↓小田原駅

参加者 五十五名
好天に恵まれ、道路事情も良く、予定通りの楽しい史跡めぐりが出来ました。



竹製ロウソク入れ 径3cm長さ18・3cm袋はもめん

小田原の郷土史再発見

植田又兵衛先生と小田原水道(早川上水) 1

「史談会」史跡めぐりに参加して

石井啓文

はじめ

いたという。

今年五月の史跡めぐりに参加した。生憎の雨を物ともせず若さ溢れる?二十名余の参加者である。お昼前に山王神社隣の宗福寺に着いた頃は一時雨は止んでいた。江戸時代初期、東海道移設に伴い領主から現在地への移転を命じられた文書を蔵して

当会編集長植田博之氏が「ここに來たらわが家の墓地も見ても下さい」と案内された所に「植田又兵衛先生之墓」があった。左右側面には数多くの氏名が、裏面に漢文で顕彰文が刻まれている。氏の曾祖父のお墓で、碑文は未解読であるという。

(正面) 植田又兵衛先生之墓 宗福寺(小田原市浜町) 植田家墓地

(裏面) 先生以弘化四年霜月生于相模小田原資性剛直家素不富皆為樵夫具歴辛若及参

(解説)

町政於教育於水道経営大有績矣志常在殖産興業而克敷報德之教旨持勵不倦焉又長算數晚年授教入門三百餘名大正三年四月九日歿弟子醜資樹碑永表念師之誠云爾 辱知 峯尾文太郎撰并書

先生におかれましては、弘化四年十一月、相模小田原に生まれ、剛直な天性で家は質素にして富まず、かつては樵夫も経験した。代々にわたり辛若に及ぶ。町政に参画し、教育や水道の経営に大きな功績を残した。志し常に殖産興業に在り、報徳の教旨を能力を尽して四方に広め、持勵たゆまず。また、長く晩年まで算数を教え、その入門者三百余名。大正三年四月九日没す。弟子資金を出し合い、碑を建て永く思いを表す。師の誠かく云う。よく知っている人 峯尾文太郎撰・書

(左側面)

(右側面)

- 少年部委員 大澤福太郎 鈴木久太郎 土谷源右衛門 賛助員
- 石田 茂 橋本源次郎 守田 房吉 池田六三郎 福山 茂吉
- 井上 康治 本多榮太郎 親戚 岩本久太郎 神谷 寅吉
- 柏木重太郎 小澤萬太郎 林 佐太郎 神谷半次郎 多田 重一
- 山本孟一郎 加賀 定吉 志村竹次郎 植田 又吉 林 徳次郎
- 小林 市蔵 高木 信次 林 榮造 永井 光三 石田徳次郎
- 杉田 彦行 金子 幸造 植田 ユキ 小澤 丑松
- 青年部委員 山崎 林蔵 高橋 幾蔵 富澤 浦吉
- 鈴木 政吉 神保儀三郎 川瀬鉄五郎

- 門人少年部 上國 定吉 青木 正夫 神谷清次郎 加藤清太郎
- 國井 吉三 湯川 金三 西田清次郎 小島 為吉 土谷 辨三
- 柏木 長吾 古郡 有三 青年部 濱田 富衛 高橋弥四郎
- 青地 芳夫 込山喜一郎 須田莊之助 小林智恵治 加賀 祐造
- 大木 吉郎 尾上 慎三 日比野初五郎 榊原 岩吉 林 松造
- 廣澤伊之助 神保 太平 林 竹次郎 小嶋 久治 西川清四郎
- 小澤 榮 林 章 奥津榮次郎 林 吉蔵 西川金次郎
- 鈴木松次郎 小澤角太郎 田代 筆吉 林 直蔵 橋本豊四郎
- 山口源三郎 富田 耕三 山口安太郎 星野 彗吉 沖山安太郎

碑文を基に、次の六項を二回に分けて発表します。

- 一、植田又兵衛先生顕彰文
- 二、植田又兵衛と小田原水道
- 三、植田又兵衛の私塾
- 四、植田又兵衛とロシア正教
- 五、植田又兵衛の職業と事績
- 六、小田原の年中行事

「水道浚」

一、植田又兵衛先生顕彰文
これまで、先祖調査を頼まれ、墓碑名の判読にも経験があることから顕彰文に興味を覚えた。

数日後、天気の良い日の午前と午後、曇り日の三回、水を流し光線を活用して判読した。後日『小田原近代教育史』(以下『教育史』と略す)と、『科学史研究第38号』(以下『科学史』と略す)に見出し出した解読文と照合して、決定版と言えるであろう判読文を左に示した。そして、漢文に造詣の深い酒匂の郷土史家川瀬速雄氏に、読み下し文をご教示いただき判読文の下段に記した。解読文から概略、次のことが読みとれる。

植田又兵衛は、弘化四年(二
 十一月小田原生まれ。町政に
 参画し、教育や水道経営に大き
 な功績を残した。和算の門下生
 が三百余名、大正三年(二九四
 月に六十六才で他界している。
 碑文の撰・著者は峰尾文太郎、
 建立者は私塾の委員と親戚・賛
 助者が三十七名(左側面)、塾生
 の青少年たち四十三名(右側面)
 の、合計八十名を数える。

私は、この判読から二つのこ
 とに大きな興味を抱いた。一つ
 は「早川上水」を調べ「日本最
 古の水道」にも関わらず、当市
 は「用水(小田原用水)」と称し
 ている。水道経営に功績があつ
 たとあり、水道(早川上水)とす
 べき論拠の一つになるのではな
 いだろうか? また、明治時代
 に先生をしていたということは
 武士ではなかったか? 植田氏
 の従兄弟である植田武二(ペン
 ネーム上田謙二氏は、私とは中学
 校の同級生で、日本随筆家協会
 賞を授賞した『父の涙』で「私
 の家は父の代で十八代になる旧
 家で、小田原城の鍵番をしてい
 たので鍵屋という屋号がある」
 と書いていたことを思い出した。
 植田氏にこうしたことを訊ね
 ると、小田原藩士ということに
 判らない。消防について聞か
 されており、田代亀雄著『小田原
 昔話』にも書かれている。水道

経営は、消防に関係していたか
 らであろうという。

『小田原昔話』には「宮の前の
 はふや、高橋屋、柏又などが主
 になつて、新しく消防を興した。
 後年、新宿の上田又平も加入し
 た。中略 因みに有志消防組の発
 起人だったはふやと上田又平は
 耶蘇教信者である」とある。

二、植田又兵衛と小田原水道

水道経営とあり「明治小田原
 町誌」(片岡永左衛門著・以下「町
 誌」と略す)を調べて驚いた。

明治二十一年(一八七)の分水事
 件落着の記述に、植田又兵衛の
 名が記されている。この記述は、
 早川上水を「小田原宿水道」と
 記した貴重な史料として私は何
 度も活用していた。これ以後、
 同三十四年(一八九)までに町会議
 員当選を含めて二十一回、植田
 又兵衛の名がある。同書から彼
 の活動が知れる記述を抜粋する。

明治二十一年八月

分水事件処理のため水利常務委員を置
 き加藤定通、高橋茂興、今井廣之助、石井
 柳兵衛、小牧克房、板倉重三、植田又兵衛の
 七名当選す。

同年 十一月

分水事件落着に付板橋と交換文書案を
 決議す。分水事件は藩政当時早川の流水を
 板橋村字御塔坂下より引水し小田原宿水
 道及城の外壕等にも引用し、水路掛の足軽
 は常に巡視し漏水又は水路の防害を取締



▲植田又兵衛先生顕彰墓建立記念 (大正4年頃)

植田博之氏所蔵

り早敷と雖も飲用水に欠乏を生ずる事な
し。余水を以て田地に灌漑もしりしに、
維新以来は旧慣を破り板橋も新田を開墾
し、水車も又増設し潜水水の量を増加し小
田原に引用の水量を減せしも未だ甚しか
らざりしに、本年は春來河水減少し晩春よ
り降雨少なく田地は旱害に至らんとせし
により土石を以て水路を塞ぎ其他種々の
防害を為したれば、市内の水道は乾燥し飲
用に困難するより六月廿三日今井廣之助、
植田又兵衛等は各町有志者を会し協議の
結果、事務所を松原神社に置き各町より撰
出の委員は昼夜詰切市内の漏水を取締り
水路の防害を除去し郡長又は警察署長に
具申し飲用の満足を与えられん事を乞ひ、
屢々板橋及び郡衛とも尖突し七月廿一日
に至り左の伺書を提出せり。

その伺書は「飲用水路堰場之
義二付伺」と題し、小田原幸町
外四ヶ町戸長石原重固から足柄
郡長中村舜次郎殿宛提出された。
これを受けた郡長は、板橋と
の水量の分配は郡衛及び警察署
長に委任したとして明言を避け
た。そこで、小田原側は「飲
用水之義二付願」を、「当小田
原駅ノ儀ハ古來早川流水ヲ板橋
地内ヨリ引來リ飲料ニ供シ
云々」とした書き出しで、小田
原駅水道委員高橋茂興・今井廣
之助・植田又兵衛以下三十七人

明治十四年市立中学校一覽表

名称	学科	所在地	設立	学期		授業		教員		生徒		授業料	学校本主
				年数	日数	男	女	男	女				
自卑舎 役義学校 蒼生学校	習字	相模国 小田原新玉町 小田原幸町	明治 十二 十三	八年	二八四	二	一	二	二	六	九	六三	植田卓爾 役 義正 村尾晋助

の名で県知事に請願し、郡長の
不信任を決議したことから容易
ならざる事態となった。県知事
は、富水村戸長と芦子村戸長に
調停を依頼し和解することにな
る。

その交換文書は、水門下の適
当な場所に分水口を創設し、小
田原駅が五分五厘を板橋村が四
分五厘を使用すると定めた。
それにしても、松原神社に事
務所を設け、昼夜詰切りで水路
を護つたとは：

明治二十二年二月

飲用水路改良工事及配水整理のため臨
時委員を選挙し今井廣之助、植田又兵衛、
高橋茂興の三名当選す。同年六月、工事中
なりし大窪村板橋飲用水分水口落成す。七
月、町長より各町水路委員に謝状を贈与し
たり。(謝状) 割愛

明治二十三年三月

土木衛生の常務委員を選挙し高橋茂興、
今井廣之助、植田又兵衛当選す。同年七月、
町村制第拾条に依り飲用水使用規則の許
可を受く。左に其全文を掲ぐ。(小田原町
水道規則) 割愛

明治二十五年五月

小学校新築のため臨時委員三名を選挙
し植田又兵衛、今井廣之助、太田定矩当選
す。

明治二十六年十月

小田原農芸会発会式を挙行す。該会は会
長を置す杉浦久珍、上原関次郎、片岡永左
衛門、植田又兵衛、辻村泰児を幹事とす。

明治二十七年七月

伝染病院敷地指定委員を選挙し今井廣
之助、片岡永左衛門、太田定矩、高橋茂興、
植田又兵衛の五氏当選す。

明治二十八年九月

水道改良調査委員を選挙し植田又兵衛、
片岡永左衛門当選す。

明治二十九年一月

水道調査委員植田又兵衛、片岡永左衛門
より調査を報告す。左に技師の報告書を掲
ぐ。(小田原水道改良工事再調査報告書)
割愛

明治三十年五月

大窪村板橋より十字町光円寺前に至る
水路改良工事監督委員を選挙し植田又兵
衛、高橋水就、今井廣之助当選す。

明治三十一年五月

常設委員の選挙をなし植田又兵衛、高橋
永就、藤田金十郎当選す。

明治三十二年三月

常設委員植田又兵衛は学校増築につき
尽力不尠の故を以て金拾円を特別報酬と
して贈与す。同年五月、常設委員任期満了
に付選挙をなし植田又兵衛、太田定矩当選
す。

明治三十四年二月

里道変更、浜砂利採掘及参拾参年度追加
予算調査委員を選挙し中田壽一郎、太田定
矩、市原半兵衛、植田又兵衛、星崎廣助当
選す。

以上、碑文三行目の「町政に
参画し、教育と水道経営に功績
を残した」が立証される。

水道については、分水口(現
お塔坂下の分水地点であろうか)
の創設で事件を落着させ、二年
後の明治二十四年九月に近代水
道敷設の議決を経て、片岡永左
衛門と共に「水道改良工事再調
査報告書」を完成した。

小田原近代水道敷設の原点で
ある。又兵衛の他界後、近代水
道は敷設反対運動や騒擾事件も
起り、昭和十一年と大幅に遅
れて完成するのである。

又兵衛が町会を退いた後の明
治三十七年(一九〇四)、日露戦争が勃
発する。ロシア正教の信者で
あった彼は、戦争に反対したこ
とから、開いていた私塾も閉鎖
したことが次の資料で知れる。

三、植田又兵衛の私塾

碑文に、門下生三百余人とあ
るが塾名の記載がない。これを
知りたく「小田原近代教育史」
を調べた。資料編第一巻の「小
田原町学務委員職務章程」文書
に、明治二十九年三月、町会議
員植田又兵衛の名がある。また
「文部省第九年報」に、上記資
料があることを知らされる。

更に、同教育史第二巻に「植
田又兵衛の顕彰碑」の解説文と

解説があるが、『科学史』(昭和三十一年刊)の解説文と碑文を照合した結果、同書解説文に数箇所の間違いが判明した。

では、同書解説を次に示す。「明治十二年創設の「自車舎」の経営者植田卓爾は、二巻資料1(顕彰碑)の植田又兵衛と同一人物かと思われる。植田又兵衛はその碑文によると、弘化四年(一八四三)小田原の新玉に生れ、材木伐採・販売を業とし、かたわら報徳を学び、町会議員としても活躍した人物であった。また彼は若くして和算を学び明治中葉より付近の子弟に数学・漢学を教授した。(算友会編「和算研究」十一号・昭和三十六年刊)

そして、数学の指導は開平・開立・微積分にまで及び、時には小学校教員が指導を受けに来たといわれる。この顕彰碑の側面には少年部・青年部として多数の門弟の名が刻されている。後述するが、植田卓爾と又兵衛は別人である。次いで、この本が参考にした「和算研究第十一号」を、国立国会図書館に訊ねた。同書論考(以下「藤井論考」という)の概略を示す。

植田又兵衛とその門下

藤井長雄

植田又兵衛は、弘化三年(一八四二)十二月二十日、植田永左衛門

の長男として相模国足柄下郡新玉町一丁目一六番地(現小田原市新玉)に生る。若い頃は、樵夫、飛脚等をしてかなり苦勞をしたようであるが、確かなことは判らない。塾を開いたのは明治の中葉で、この頃は湯屋であった。その後之が家業となり現在も続いている。

塾での教授内容は加減乗除を主とし、除算は、八算総まくりといつて一三三、四五六七斗八升九合をいろいろな法で割るものを十分練習させた。その教授法は一題宛やらせ、よく出来た者には付木に一等とか、其の他何か書いて与えた。之がはげみになり付木が貰いたくて勉強したが、中々貰えなかった(井上康治氏談)。加減乗除の終わつた者は更に亀井算、早割、杉なり(浜田富衛氏談)。開平、開立(井上康治、土井弁三氏談)。ケイカ弦・代数・幾何・三角・測量(土井弁三氏)にも進んだから、ただのそろばん塾ではなかった。月謝の規定はなく金では受け取らなかつたから、営利を目的とした塾ではなかつた。煙草が好きだったので、刻煙草「萩」の五〇目包を毎日一袋宛持参した。大変な煙草好きで教えながら煙草のみ、飛脚をしていた頃、江戸から小田原迄二〇里の道中、煙草の火を絶やさなかつたことがあるという(井上康治氏)。

日露戦争の時、キリスト教信者であった又兵衛は戦争に反対し、日本の敗戦を予言したため、門弟である子供達から露探(ロシアのスパイ)と云われて塾を閉鎖したが、戦争終了後は再開した。日露戦争の終つた頃、又兵衛は農民の指導者となつて下肥汲取の謝礼について斗争をした。

当時、下肥汲取の謝礼は、こやし12荷について米一俵(榊原岩吉氏談)とも15荷について一俵(井上康治氏)とも云われていたが、この制度に反対して斗争し汲取を拒否した。小田原町民は、農民側に脱落者が出ることを期待して交渉に応じなかつた。農民側は又兵衛の指導よろしきを得て、脱落者を出さず遂に町民側が屈服した。現在、糞騒動と呼ばれているものである。又兵衛の母は不詳。妻は足柄上郡塚原村小沢常右衛門二女ナミで、嘉永五(一八五三)年六月九日生。明治三年(一八七〇)八月に結婚した。

【二男五女に恵まれた縁戚関係の記述は割愛するが、五女キヨと養子縁組した助次郎も又兵衛から、算術や漢文を随分やかましく教わつた(助次郎長女ユキ談)という。また、墓碑にある親戚欄の林佐太郎(町田)・志村竹次郎(下堀)・川瀬鉄五郎(酒

匂)・神谷半次郎(下新田)・植田又吉(緑町)は、子供たちの婚姻によって成立した親戚である。】又兵衛は、下水工事の作業を手伝っている時か、つた小さな瘍から破傷風にかかり大正三三(一八四四年)四月九日死亡した。

【注】談話に「土井弁三」の名があるが、墓碑は「土谷辨三」とあり、本書解説も「土谷」である。

次いで、又兵衛の門下生六名について記している。

浜田富衛は、明治二二(一八七〇)年四月、小林勘大の三男として小田原に生る。母の名不詳。明治二二(一八七〇)年五月、小田原町万年四丁目、浜田喜太郎の養子として入籍相続。植田又兵衛に珠算を習つたのは少年の頃二年間位。その内容は、総まくり、亀井算、早割、杉なり等である。現在本籍地でブリキ職。

榊原岩吉は、明治二二(一八七〇)年七月、神奈川県大住郡小中村根板間、本莊五郎の五男として生れ、小田原市新玉一丁目、榊原清次郎の養子となる。明治三十四(一九〇一)年、植田又兵衛が始めて塾を開いた時の四人の弟子の一人。他の三人は、浜田富衛、小林、橋本。子供の頃から現在に至るまで、浜田富衛とは親しい友人である。

(つづく)

中村原郷 の思い出

⑫

遠藤治郎

稲荷社の御告げ

昭和十年(二五五)頃まで中村原の地で茶屋を営む家が四・五軒有った。小学校に通う途中、金藪の広濟寺大門右側に二階建の茶屋があり一人暮らしの老人がいた。金藪の辰さんと村人が言っていた。電動の蠅取棧があつて珍しく、登下校の際に度々見に寄つた。老人は子供が好きで菓子等をよくくれた。或る日数人で寄つたら芸人が来ていて、コップと板を何段にも積み上げて見せてくれた。茶屋で働いていた女はこの地に嫁いで今でも健在である。何時か老人が居なくなつて屋敷神として祀られていた稲荷様が荒れていた。昭和二十九年に農協の役員になつた組合長の森さんが、白狐が枕辺に現れて金藪の稲荷社を祀るように御告げがあつて目覚めた。隣の畠

を耕作していたので自分に告げがあつたと信じて二月十一日に近所の何人かを招いて祀つてやつたと話して下さつた。四十年昔の話である。

再会

昭和四十四年(二六五)に禅龍寺の墓地の整理の話が進んで、二宮の橋川さんが約二百四十坪の畑を離作されたのを機に、新墓地を造り、旧墓地の通路に触れる家の移転が、総会で決まつて設計を任された。

早速八尺と七尺の大きさで南に五段、各段ごと南側に三尺の通路を取り、排水を考慮して百分の一の勾配を付け、皆さんに提案した。賛同を得て、造成工事も終わりに、旧墓地の十何墓の移転という事になった。住職に供養の経をお願いして移転墓地の堀り起しが行なわれた。

この地は粘土質で、墓地によっては水が溜まつていて、死人が蟻人形の姿で現れた。義兄の福松さんもその儘にいられて再会することが出来た。小生の交通事故で亡くした子と義母は二年足らずで、寢棺のままの移転。中には、子の骨を洗つて壺に納める家もあつた。皆さんが真剣になつて近在ない立派な墓地の完成となつた。留守居の岩本君の話では、雨の夜掘られた土が青く炎えたと聞いた。

不思議な知らせ

昭和四十一年(二六五)十一月五日昼頃、小学校一年の長男が交通事故に合い、急ぎ相手の車で山近病院に行く。後のことを近所の人にお願ひした。抱き抱えた吾が子は手足が折れ、鼻から出血している。

その頃曾我の生家の母が、黄色の帽子を被つた子供が近付いてくる。下原の利治かと思つた。ところが郵便夫であつたと言ふ。急逝した時の霊が知らせに来たと聞いた。

寺の留守居の人の話では、檀家の人が亡くなるに必ず本堂の硝子障子に物が当たる音がする。間もなく人が死んだと寺に知らせがある、と語つていた。親や兄弟にも何かの方法で知らせがあるように思える。また、家畜にも畜霊があつて、馬の霊は焼死の場合は七代も祟りがあると古老に聞いたこともある。小田原畜産会の行事で毎年五月に久野の総世寺に於て大森住職にお願ひして畜霊祭を行う。豚、鶏、乳牛の霊を祀る行事である。法話の中で家畜にも畜霊が存しているいろいろのことが起きると言うこと。

家伝の秘薬

昭和七・八年頃、小学校から帰つたら中村原字栢山の田約一反歩ほど養父が三本鍬で荒起しをしているから中飯を届けなさいと養母に命じられた。真砂の坂道を登って行くと小流に芹が群生している。春田打ちと言つて田を起す。途中の小高い丘の畑に美しい花が一面に咲いている。養父に

聞いたら芥子かひしの花だという。当時は芥子の栽培が許されていて、家伝薬の腹痛止めと江戸屋の老人が売り歩いていた。

近所のムラという老婆が家伝の秘薬と言つて烏瓜の種を乾燥して粉にして止血剤として売つていた。或る日、相模半白瓜の出荷小屋の前の空地で子供が独楽廻しをして遊んでいて。子供好きな養父が子供と一緒に廻して紐ですくい上げて掌に受けようとして、五、六歳の子供の頭に触れた。鉄輪の独楽の故か血が頭より吹き出す程流れた。養父は、急ぎムラさんの薬を貰つて頭に付け手拭を当て血が止まつた。一緒にいた私は不思議な妙薬が有るものだと思つた。

乗合バス

昭和十年(二五五)頃迄小竹の中井村の境より国府津駅迄上倉と言う会社の十五人乗り位の小型の乗合バスが一日四往復していた。坂道でそのバスと走りっこをして遊んだ。その頃ある国府津の蜜柑問屋の貨物車が蜜柑を積

んで通る。坂道で走りか鈍くなるので、上級生が飛び乗って蜜柑を四五ヶ落とす。下級生が拾って上級生に渡して少し分け貰った思い出が昨日のようである。

今日では二宮駅・国府津駅より大型のバスが一日何往復も乗り入れている。

大磯銀行の倒産で田畑を売り

上町山は小舟の早野さんが開墾して小苗を植えたと云う。偶々大磯銀行が倒産のため、当時のお金で五萬円とかで井上問屋に売却して預金者に支払った。小竹の竹見さん、同じ加藤さんは押切の支店長をしていて、四・五萬円のお金を用意のため四町歩も五町歩も売却して預金者に支払ったとか。また、大磯銀行の理事長の連帯保証人とかで二町歩余り売却した人がいたと古老に聞いた。

兎屋

昭和の初年頃より兎を飼育する家が全国的に多く軍の軍服の裏地に使用して旧満州や、飛行士の

服装に使われたとか。その為兎の飼育が奨励されていた。小学校から帰ると小さな背負籠を背負って兎の葦摘みに行かされた。中村原宇道の下の畠の中の一軒家で、雄兎を籠に入れて各戸を廻って受精させる業をしていた。兎を飼う小屋は、石油箱と言って石油一斗缶を二本入れる木箱に若竹を割って釘で止めて六・七寸の板で出入口を造ったものである。兎屋が親兎を何匹か買って行くとお小遣いを貰って溜めて独楽を買ったりした。同じように種豚を飼養して種付けさせる豚屋業も有った。兎は毛の長い「アングラ種」が特に高値で売れたとか。大東亜戦争も次第に激しさを増して昭和十八・九年頃には人の食糧も不足勝ちになり次第に兎を飼育する家も少なくなってしまう。今日では幼稚園とか動物園とかに飼われているようである。

俵約家

明治三十七・八年(二六四)に日露戦争で田代さ

んが村で一人だけ戦死されて、中村原の広濟寺の門前に祀られてある。小学生の時に先生に連れられて墓参りに行った思い出がある。養父の話では出征する時軍刀を買うために畠を売ったと話してくれた。養父は、幸に広島で終戦となつて復員出来たとも言った。日露戦争で負傷者には金鵝勲章を受けると年に百圓のお金が下賜されたという。

或る篤農家の人は一生懸命に働いて百圓の御下賜金で毎年のように田畑を一反歩づつ買つて大百姓になられたそうである。鳶職だった養父の兄は、国府津に住居して若いうちは茶屋遊びして茶屋の女を妻に迎え、お金は残らなかつたとも聞かせてくれた。近年工業団地や住宅団地等にかかりその篤農家の人は大金持になつたようである。

最近では篤農家もなく、子弟は工場や会社務めに出来て農業の後継者も少なくなつた。

士の靈

戦国時代の幕あけは、

北條早雲の小田原城攻略から始まると云われる。小田原城に拠る大森氏は平塚に追われ、北條軍と三浦・大森連合軍の戦が曾我山・小竹山を挟んで十七年間続いた。また、北條氏を上杉謙信・武田信玄が攻めた戦いのあと、中村川と塔台川の間の台地に自然石を一つ置き萩が植えられた。畠の中に何箇所か見受けられた。戦死者の体を戦中に埋めたとも思われる。

中村原も昭和五十年頃より急速に宅地化が進んで何時しか見失なわれた。老人の話では、或る家に士の靈が出るといつて住み人が出て行く。替わつて入居した人も何時しか不在とか。昔、戦で戦死した武士の靈が供養を願つてその家に現れるのではと聞かせてくれた。最近道路の拡幅工事での家は失われた。世には不思議な話もあると思う。

子鳥と亀

昭和七・八年(二五三)頃子鳥が巢から落ちて動けなくなり、子供好きの養父は、拾つて来て飼ひ始

めた。五月も終わりの頃であった。餌に赤蛙やどじょうを捕つて与えていた。小生も可愛くなつて世話をしようになつた。鳥の子を捕ると親鳥が怒つて草葦屋根を窺うようである。最初は大きな木箱に入れて飼つていた。箱から出して座敷で遊ばせている中に隣の家屋根まで飛んで帰つて来るようになった。掌の餌を食べるようになった。小生兄弟と別れて五歳で養子に来て淋しさの余り三毛猫とも遊ぶ。

或る時養父が田園にいたと言つて大亀を捕えて来て甲羅の端に小さな穴を開けて細い鎖で繋いで飼ひ始めた。小さなみみずが好きだと言つてみみずを捕らされた。好きでないので棒の先で捕り亀の前に置く、人が見ていると食べない。一平方米位の池を造つて遊ばせた。こんな思い出も七十年近い歳月が過ぎた。

尋ねれば

すでに友なき

小米花

治郎

(つづく)

酒匂史談 15

川瀬 速雄

4 大見寺 酒匂二ノ四一ノ三七

浄土宗 光明山無量院 大見寺。『新編相模風土記稿』に、「大見寺」光明山無量院と号す。浄土宗、京都知恩院本。中古は時宗の(小庵)。天文三年(一五五四)僧退堂小庵の古跡に就て起立す。(退堂は下總飯沼弘経寺七世の僧なり、名蓮社見譽と号す。天文五年(一五五五)十一月二日卒。と、書かれている。

本尊は阿弥陀三尊、(中尊は立像、高三尺五寸、恵心作)白銀観音あり。又、室町時代の阿弥陀三尊来迎図一幅が保存されている。絹本着色 縦八七・四cm 横二七・四cm。「閻魔堂」当時十六世僧連譽、享保十四年(一七三三)建立。閻魔像は四代目川辺段右衛門慶貞が寄進。(閻魔堂は関東大地震で倒壊し現在はない。閻魔像は本堂内に安置してある。)

「鐘楼」宝永三年(一七二六)どうという人が寄進した

のか不明だが大吊鐘があった。しかしこの鐘は大東亜戦争の時に供出させられ、今はない。昼十一時と除夜、又火災を知らせる半鐘代りに使われていた。

「熊谷稻荷」社風でなく、石碑に仏像を刻んだめずらしい稲荷である。境内に小田原市文化財指定の「小島家三墳」と言われる墓がある。(年号が刻まれた小田原市の墓の中で最も古いものである)

「中央 宝篋印塔」(高四尺七寸。右者为左衛門入道也、沙弥性阿、比丘尼満阿、徳治三年(一三〇六)月二十三日。)

「右 宝篋印塔」(高六尺 相州足下郡於酒匂郷、為小島行西也、天文二十一年壬子年(一五五二)四月二十一日 孝子敬白。)

「左 五輪塔」(高七尺六寸。相州西郡酒匂郷小嶋治部少輔敬白。天正二年(一五七四)八月二十二日(北條氏より酒匂小代官を任命されていた治部少輔

が、亡父左衛門太郎正吉のために建立した墓。これら石塔の台座は、関東形式の反花座である。墓苑でひときわ目に付くのが川辺家歴代の墓である。西南の役に従軍した田原坂の激戦で負傷、大阪陸軍病院で死亡した当村の相原一等喇叭卒の墓、貸別荘松涛園で客死した北海道開拓の功勞者、永塚良吉の墓碑等もある。

大見寺境内で採取した布目瓦片三個を私は保管している。

5 妙蓮寺 酒匂三ノ六ノ二九

日蓮宗 廣昌山妙蓮寺。妙蓮寺廣昌山と号す。(下総国中山法華経寺末)開山日親、應永三十三年(一四二六)六月建(長享二年(一四九〇)九月十七日卒)開基は山崎氏女なり。(法号妙蓮信女)『新編相模風土記稿』

本尊宗風の諸尊を置く。又古くから伝えられる木造鬼子母神像がある。慶長八年(一六〇三)に領主大久保相模守忠隣が千二百二十坪の地を寄与し、竹

木の伐採を禁じた。一説に酒匂新堰が開削された時、住僧の祈禱の効ありと認められ、この寺地を領主より寄与されたという。又別説に酒匂堰開削に用いた石鑿、その他の器具を、酒匂鍛冶村が献上したその功によるとも言われている。

年代不詳の八月、藩主より重要人物が酒匂村に一泊するので、休息所を建て、寺への道を広げるよう名主に命じた記録がある。『相州古文書』

妙蓮寺の開基山崎氏の立派な宝篋印塔のかたわらに、山崎氏一門の墓地があり、その墓石の一つに、酒匂鍛冶住人、山崎嘉兵衛尉、享保五庚子年(一七二〇)天二月十九日、と刻した笠墓石がある。山崎氏は酒匂鍛冶村の統治者であり、村の組頭を勤めていた。妙蓮寺は酒匂鍛冶一統の檀家寺である。

寛政中(一七九〇)文化七年(一八〇〇)当寺二十三世僧日誠上人の筆子塚がある。

6 法善寺 酒匂二ノ三八ノ三三

日蓮宗 神力山法善寺。『新編相模風土記稿』に「法善寺神力山」と号す。開山日敬、(寛正二年(一四二二)九月十五日卒)永享十一年(一四三〇)中野禪門入道創立。眞言宗の寺であったが、長祿三年(一四五九)日蓮宗に改宗した、とある。「本尊」宗風の諸尊。「七面堂」元文元年(一七〇二)日賢上人建立。関東大震災で倒潰し今はない。寛政六年(一七九四)の吊鐘あり、「鐘銘」に、「上總国山辺郡土氣庄大竹村。経王山。常泉寺時代、瑟通院泰吟日精、寛延三庚午年(一七五〇)十月十三日、奉品妙名、一千廻、世話人、三左衛門、太郎左衛門」の刻がある。

天正四年(一五七六)須藤惣左衛門太良開基。須藤家は『後北条家役帳』に登録された筆頭職人頭で、小田原須藤町に屋敷をかまえていた。酒匂に移住した年代、理由、又本家か、分家か不詳であるが、北条氏の時代、鎧兜等武器の需要の理由から、酒匂鍛冶の地金入手に関係あるかもしれない。当寺十三世日追上人の

弟子像がある。二人の法
第子と二十名の男女の姓
名が刻まれている。日追
上人は元文四年(二五五)卒
であるので、寺子屋師匠
は享保期(二七〇頃)と思わ
れる。大正初期火災にあ
い、過去帳、仏具、諸記
録が失われた。

旧家で名主や村長を勤
め、「酒匂ものさし」の元
祖鈴木新左衛門家の墓石
群が目を引く。

昭和三十五年(二九〇)、亡
父追善供養のため、小嶋
勉(家号絹屋)が本尊を寄
進した。これは本尊が浄
土宗の諸尊のため、日蓮
宗の本尊にかえたいとい
う住職の希望によるもの
と聞いている。翌年同氏
が厨子も寄進した。小嶋
家は、もと家号を「鍵屋」
(酒匂鍛冶に関係してい
た)と呼ばれていたが、明
治初期、養蚕が脚光を浴
びて来たので、いち早く
綿畑を桑に植え替えて養
蚕を始め、絹織物、刺繍
した絹ハンカチを小田
原・箱根の旅館に行商し
て歩いた。「絹売りのオバ
サン」、「絹のオバサン」
と評判になり、いつしか
家号も「絹屋」となった。

(現在は絹屋酒店)

7 妙善寺 酒匂三ノ
一ノ一七。

法華宗 眞如山妙善
寺。『妙善寺眞如山と号
す。法華宗、(身延久遠寺
末)開山日明、(天正十六
年(二五八)九月十二日卒)。
本尊宗風の諸尊を置
く。『新編相模風土記稿』
木造三宝本尊を祀る。
釈迦像像底部と、多宝像
像底部に天明三年(二七三
の年記のある「墨書銘」
がある。

木造不動尊と愛染明王
坐像を祀る。
両像台座に「墨書銘」
あり。愛染明王像には、
安政四年(二五五)閏五月の
年記があり、不動尊には
年記はないが同一作者な
ので同時期のものと考え
られる

開基、菊川太郎左衛門。
本杉太郎左衛門。『新編相
模風土記稿』記載。旧家
の條に、「長史友右衛門小
名市場の浜辺に長吏十七
軒住す、見捨地二反五畝
二十五歩、友右衛門は小
頭なり」とあり、箱根湯
本菊川太郎左衛門古文書
に、酒匂姓を下すとある。

酒匂氏が建武中、山北河
村城に籠城して敗れた
時、酒匂姓を捨て長史と
なつた。その長史一族の
菩提寺で、開基である通
称南市場(長史一族の居住
区)の白山社は当寺持で
あつた。

文化十一年(八四)二月、
当寺二十二世日喜上人の
時、天災にて堂宇焼失。
安政四年(二五五)同上人
再建。不動明王も愛染明
王もこの時祀つたもので
ある。

墓苑に明治二十九年(二
九〇)五月二十一日、日清
戦争で戦死した海軍水兵
内田伊三郎の墓がある。
私が小学校一、二三年
(昭和四、六年)、陸軍記
念日と海軍記念日には先
生に引率されて酒匂神社
の表忠碑に参拝し、又、
この内田伊三郎水兵の墓
にもお詣りした。

8 本典寺 酒匂三ノ
一ノ一七。

日蓮宗 永柳山本典
寺。『新編相模風土記稿』
に、「本典寺永柳山と号す。
『縁起』に據ると、当寺
は昔小名柳下にあり、も
と当所の住人柳下源吾菅

原本典墳基の地なり、(本
典、享保四年(二五三)六月
十一日卒、日隨と諡す)
僧日能(本典の子、或は孫
とも云ふ)其冥福を修し、
天文九年(二五〇)其地に就
一寺を建、地名に付いて
山号とし、諱を取つて寺
号に銘す。故に今、本典
を開基とし、日能を開山
と称す。

本尊十界勸請の諸尊を
置く。
木造日蓮上人坐像を祀
る。

水神様も祀られている。
東海道より本典寺に入
る入口に、高さ一間の石
塔がある。表面、南無妙
法蓮華經 本典寺 側
面、五百五十遠忌報恩謝
徳 裏面、文政七年(二二
三)閏八月 施主浜田源兵
衛 とあるが、文政七年
より五百五十年前は応安
六年(二二三)に当り、南北
朝の時代となる。誰の五
百五十遠忌か、施主浜田
源兵衛は当村の者か、何
者か不明である。元八木
下郷にあつた寺と関係あ
るかも知れない。

天正十九年(二五二)今の
地に移転した。此時寺域
を除地となす。本典寺は

八木下氏の檀家寺で、も
と八木下郷にあつたが洪
水で流失(場所不明)した
ので、この年、酒匂字南
川端に移つた。
元和九年(二六三)阿部備
中守正次が領主であつた
時、門前五十八坪の地を
寄与した。

元禄十三年(二七〇)十月
吉日の年号入りの灯笼が
ある。

本行院日天聖人之碑が
ある。(当村と関係なし)
昭和十九年(二九四)まで
は、檀家七軒(榎塚二軒、小
野二軒、中島、梅沢、野谷)
であつた。この七氏は八
木下氏の家臣で、寺の移
転と共に酒匂に移住して
来た。字八丁河原から土
手根、字道南にかけて寺
領であつたが、「農地開放
令」にて寺地を失い、檀
家七軒では寺の維持が困
難のため、八木下氏と関
係ない一般の人にも寺苑
を開放し、檀家も大分ふ
えて来た。

(つづく)



牢獄と刑場についての考察

澤地 英

(一) はじめに

歌舞伎の脚本(金山五山桐)によると、文禄三二(一六一四)釜ゆでの刑に処された際「石川や浜の真砂は尽くるとも世に盗人の種子は尽くまじ」と言わしめた台詞が伝えられている。秀吉の殺害を計画したといわれている大盗賊の石川五右衛門の例にあるこどく・昔から生活と密着したところに犯罪が発生したことは、国が組織化された大宝元(七三三)三月既に施行されていたことでも説明できよう。この大宝

律令によって明示されているが、官の組織化は、太政大臣を中心に右弁官があり、その下に刑務省と続き、その下に囚獄司、賦読司がある。又別に彈正台が設置された。彈正台は令制官司の一つだが、二官八省より独立し、太政大臣を除く、令官人の網紀肅正や非違を糾弾する役割を持っている。少忠、大疏、少疏、巡察彈正を置いている。直接

的には京内を担当し、諸国における非違を訴訟を通じて行うに留まっている。歴史的には、弘仁年間(八〇六、八〇七)検非違使の設置に伴って、彈正台は形骸化してゆき、長官である尹は名譽職化し、親王を任命することが慣例化したと伝えられている。その検非違使は、刑務省、京職、彈正台を吸収する形で、次第に勢力を拡大したが、彈正台などは、中世になっても強力な執行機関として存続した。(日本史事典)

ちなみに小田原旧記によると、二十将衆の中に行方彈正や、御旗本備四十八番将衆の中に、越地彈正忠や布施彈正左衛門の名がある。何か関連したものがあるのではなからうか。

屋町と云われている。旧御幸座のあったところである。処刑人はこの安国寺の観音像を拜んでから牢屋へ向ったという。又大工町の東へゆくと、本源寺がある。天台宗の本源寺前を、護摩堂川が流れていた。この川は洪取川に流れ込んでいるが、護摩堂川上流の本源寺と大工町の接点に、涙橋と云われる橋がかかっている。罪人は無念の想いで涙橋に別れを告げてから、牢屋敷へ連れてゆかれたと云われている。牢獄は上代では「ひとや」律令期には「獄」江戸時代には「牢」「牢屋」と呼ばれていた。名称は異なっても、これらは原則として未決囚を勾留し、又は有罪判決をうけた囚人を、刑の執行まで拘禁する場所であった。牢屋町と云われる名称が記載されているところをみると、江戸時代牢屋を設置したのではなからうか。

(二) 刑罰の歴史

江戸時代は封建体制が世襲とともに定着していった時代だったが、しかし犯罪増加の傾向をたどった。前述したとおり七世紀に入ると、律令制の成立で、刑罰

体系が確定するのだが、刑の種類は、笞、杖、徒、流、死の五段階で、まことにゆるやかだった。笞と杖とは叩きの刑で軽罪である。笞は細い皮によって十回から十五回。杖は太い木の棒で、六〇回から一〇〇回までと決っていた。徒はいわゆる懲役刑であり、一年から三年と限られていた。流は遠中近の三段階で、主に島流しといわれるだけあって絶海の孤島や未開拓の国であった。死は絞首と斬首の二段階だといわれている。

仏教思想の影響で、律令期から平安期までは、刑罰を軽くする傾向があったが、武家社会の鎌倉時代に入ると、御成敗式目が制定され、戦乱を契機に苛酷さが進み、刑罰は深刻化していった。例えば死刑は、磔、逆磔、串刺し、鋸引き、牛裂き、火あぶり、釜ゆでとむごたらしい刑が多くなっていた。

磔刑は、主殺し、親殺し、関所破り、にせ金、づくり、キリシタン弾圧、農民一揆、公儀に対する謀計に限られていた。(御定書百ヶ条)

何故殺人でもない関所破りが磔刑になったかと云う

と、為政者側から江戸脱出を、反逆罪と見做したからではなからうか。これは農民一揆や公儀に対する謀計にも当てはまる。なお異教徒の弾圧は、宗教がからんでいるだけに、異常なまでの苛酷さになったのではなからうか。

とくに小田原地方は、甲州、駿州と国境を接しているため、関所破りが比較的多発と思われたが、意外に件数が伸びていないのは、藪入りで済ませ、関所破り未遂事件として処理していたからである。羽根尾境へ送り帰される追放処分が待っていた。そしてそのことは、やはり関所周辺の領民の協力があったのではなからうか。この外他国に比し、御厨一揆、名主の右京亮や下田隼人といった抵抗運動が極刑となっていたが、数例なので割愛したい。ともあれ江戸時代牢獄の標準は、現在で云う刑務所長格の囚獄という牢屋奉行がいて、世襲制を保っている。その輩下に同心があり、書役、改役、当番助方役、鍵役、打役、調べ役、医者等数十名に亘っている。江戸時代初期は、戦国期の遺

風を伝えて一般予防主義的な厳刑を中心としていたが、八代將軍吉宗によって享保二二七三「公事方御定書」が制定後は、厳刑が軽減された。しかし依然として死罪は磔刑などが保持された。磔刑は、死罪の上ではとくに重く、十字架を背にした罪人を尻の穴から上に向けて口まで槍を刺すというむごい刑である。大体は槍を刺す前に痛さに耐えかね、失神したという。又はワキの下から反対側の肩口にかけて槍を突いたという。

(三) 関所破り

徳川幕府は、中仙道や甲州道、東海道など日本各地から江戸へ通じる主街道の要衝に、五十三ヶ所程の関所を設け、それらのうち二十二ヶ所を「重キ関所」としたといわれている。そしてそのうち東海道の箱根と新居、中山道の碓氷と木曾福島、中山道の碓氷と木曾防備に欠かせない関所として重点的に管理した。それらの関所は、その場所の藩が管轄し、管理運営に關し幕命に従うことになったという。小田原藩が箱根関所を管理したのは当然であらう。

元和五二六五開設された箱根関所を中心に、小田原藩は駿州や甲州と国境を接する関係上、根府川、仙石原、矢倉沢、河村、谷峨の六の裏関所が続々と設けられた。厳重な善の箱根関所を破る事件が起っている。承応二二五三六月十一日というから設置して三十四年目である。永代日記によると、捕ったのは何と徳川綱重(家光の子)の小姓松下清兵衛という中間である。今後刑に処せしめとすることで磔十九年後の元禄十五二五三三に箱根の関所破りとしては伝説となつていのお玉が池の玉の事件が発生した。豆州大瀬村の百姓太郎兵衛の娘玉は親思ひであった。両親が年頃になり、よい家へ嫁がせたいと思い、江戸の新向島で手廣い商賣をしているいとこの米左衛門の家に、行儀見習のための女中奉公にいかせた。文禄十五年になり十七才になった玉が、松の内が明けたとき、郷里の父が風邪で危険だといふ知らせを聞き、矢も楯もたまず、主人に打明け、快よい承諾をうけた。しか

し出女の法度は厳しく、往来手形の他に関所手形の発行が必要となり、その手続きで日時を費し二月初めとなった。ある日使いを頼まれ歩いていると、彼方に雪を冠った富士山をみた。富士をみたことで郷里の伊豆を思い、病身の父を思い、いつの間にか西の方へ足が向いていた。箱根関所で手形のないことを知った玉は、夜に紛れて裏手の屏風山に進んだが、屏風山は要害山であり、関所破りを防止する柵木に足が引掛り、見廻りにきた関役人奥作平に捕まる。逮捕後すぐ傍の笈平で、検視と警固のために来ていた大勢の役人達に囲まれ斬首された。(関所日記書抜) 斬られた玉の首は、なづな池の水で洗われ、獄門台にのせられ三日間晒されたという。道中旅人は、そのむごさに涙を流し、それ以来なづな池は、お玉が池と呼ばれるようになったといわれている。

女性である玉が斬首されたことは、何か事情があったのであろう。なおこの他箱根関所では五件六人発生。ちなみに裏関所の根府川が四件五人、仙石原が一件六人、矢倉沢が三件五人となつている。(関所日記書抜)

(四) 裏関所破り

裏関所の一つである仙石原関所破りは、特異な事件であった。処刑されたのが四人同時というのも、日本の関所史上最も悲惨な関所破りだからであろう。天保十一二五五五月十五日というから、明治維新までと僅か二十七年という文明開化の足音が聞こえるという時代であった。祭文讀みの男四人女二人の一行が、関所破りをしたという密告があったために、関所の定番人が六人の跡を追ひ、三日後に逮捕、取調べをうけている。心ない密告者のために、関所破りをしていない善良な旅芸人が、無実の罪をうけたという。やり切れない事件でもあった。一行六人のうち男四人は、宮城野境にある仙石原村大井平で磔刑になり、密告した老婆は刑場で褒美の米俵二俵の上に坐らされ、処刑を見せられたという。その後老婆は発狂し、その家は没落したと伝えられている。以後仙石原で関所破りは発生していない。(箱根関所史料

集) 仙石原については、要するに裏関所の性質として実績を挙げるためには、無理した挙句の結果ではないだろうか。

(五) 刑場としての条件

日本歴史地名大系によると「多古は北東で狩川と合流した酒匂川が東端を流れ、久野川が西南境を流れている。西は穴部村、南は井細田村、北は蓮正寺村に接する。甲州道が中央を南北に通り、村中で大山路と分れている。酒匂川の対岸は飯泉村に通じている。小田原所領役帳によると、笠原美作守、九九貫八〇〇文西郡多古村、松田六郎年期貫二分、九九貫八〇〇文多古村」とある。近世は小田原藩領。永代日記によると、藩主稲葉正則が当村の河原で鷹狩を行っている。明暦元二五五十一月二十日盗みを働いた者の田畑を没収し、入札によって中島村が落札した。寛政七二五五関所破りの農民が当村で処刑されている。(御仕置例規集) 藩の仕置場があったと伝承されている。天保初期の家数五十一(風土記稿) 曹洞宗玉宝寺は永禄二二五五坪和氏統より十貫文の寺領寄進

をうけ(県史三)近世中期五百羅漢木像を蔵している。鎮守は白山神社。」と記されている。

そもそも多古村は、分かれて大山道となっている蓮正寺村を過ぎると、大山詣りの阿夫利神社への道となる。酒匂川対岸の飯泉村には、坂東五番の霊場として巡礼詣りの多い飯泉観音となっている。村中央を走る甲州道は穴部村に達しているが、その先は曹洞宗の大本山最乗寺への道に続いている。つまり街道筋でも交通の要衝で、旅人の往来が激しく、磔刑という処刑公開主義の刑場として多くの領民等の防犯意識の徹底を期するためにも、最適の条件を具備した村ではなかっただらうか。しかし別の角度から考えると、村民にとっては、とんだ災難ではなかっただらうか。

ちなみに江戸では北の位置に千住街道が走る小塚原刑場、南の位置には東海道筋が通っている鈴ヶ森刑場が当てはまる。前述したとおり関所破りは反逆罪と見做しているもので、幕府側してみると、管理は直接土地の藩に任せ

たとは云え、関所破りの犯行後は取調べと称し極刑の立場上、慎重の上にも慎重を期している。このため関所周辺の村々は、領内農民の年貢負担に加え、関所を正常に運営する役目があるため「守り村」として次の負担を課せられている。

これによると、
一、御番所柵木、矢來の修復、関所周辺の掃除に人夫を出す。
二、山抜き(関所破り)があつた場合村中総出で逮捕に協力する。

三、月二回番の交代時の人馬。年一回の要害廻り(関所周辺の山を要害山として立入禁止、樹木の伐採禁止をする。)の人足を提供する。

と記されている。(関所史料集)
第一項目にある矢來の修復という面から考えると、地元が刑場だったことを示したと云えよう。さらには御定書百ヶ条によると、依然として関所破りを磔刑として決めているが、ここでも

一、山越えした者は、その所において磔、但

し男に誘われて山越えをした女は奴。
二、関所を忍び通つた者は重き追放、但し女は奴。

三、口留番所に女を連れて忍び込んだ者は中追放但し女は領主へ相渡すこと。

奴とは女の髪を切り、奴婢となるもので、望みがなければ牢内に差置くと規定されている。これは前述のお玉事件が伏線で、お玉の批判が改正をもたらしと思われる。

さて前述したとおり関所破りの農民が多古村で処刑されたというのは誤伝と思つてよいのではなからうか。だが調査したところ次のとおり結果になった。寛政七(一七五五)矢倉沢関所で、二人連れの不審者を訪問したとき、武藏国三反田村の百姓織右衛門夫婦が、盗品故買の罪で容疑者となり、このため定泊していた戸塚宿を追われ、静岡まで来たが、山伝えに御厨まで歩いてきたと自供した。戸塚宿から関本村を通り酒匂川上流を四十八瀬川越え最乗寺を左に見て険しい山を割れ入つたというのである。し

たがって箱根関所は勿論多くの裏関所をどのようにして越えたのか皆目見当がつかない。そんな次第でどこで磔刑を処刑してよいか迷い、協議の挙句不明のため困り果てた小田原藩の役人が、このてんまつを報告したあと、処刑場所をどうするか幕府に伺いを立てた結果、多古刑場に定まったのではなからうか。

(六) 百たたぎの刑場跡

小八幡の三宝寺西方百米辺りにある四つ角が、「百たたぎ仕置場」と伝承されている。

江戸時代の名主の裁量で、軽罪の者を見せしめの刑を加えたところだという。郷土自治の史跡としては珍しいと付記されてお

り、たたぎは刑罰として昔から施行されてきたが、時が経つにつれ拷問に移行されていった。つまり刑罰としてのたたぎは自然消滅の形となった。その消滅の理由はこうである。そもそも大宝律令に定められた拷問は、拷訊といつて囚人を拷器にくくりつけ、杖で背中や臀を打つことだった。二

十日毎に三度に分け、二百回以上の回数で打つたとい

う。容疑者の罪が確定すると、笞や杖による刑の場合、その罪が本刑の打数以内に

限ることとされた。なお七十才以上又は十六才以下の者、廢疾者や僧侶は除外したといわれている。妊婦も産後百日を経たないうちは、拷問しないこととなつていた。しかしこれら温情ある規定は、武家政治となつて影をひそめ、厳しくなり、江戸時代になると、

なお悪盾化し、犯罪の増加に伴い、自由を強行するあまり、水責め、火責め、石責めと苛酷な拷問と化した。したがって拷問は秘密裡に行われ、薄暗い拷問蔵に於いて行われたという。

思うに磔刑という死罪があまりにもむごかつたため、情状酌量の下、罪一等を減ずるものとして百たたぎがあつたのではなからうか。

したがって名主の裁量云々や軽罪の囚人を見せしめ云々という解釈は、妥当性がうすいのではなからうか。

(七) 結び

ともあれ牢獄と庶民公開の刑場をセットにしたところに、江戸時代の犯罪史上

特意性があるのは興味深い。

(完)

私の青春 ⑬

続 京都練習飛行隊と終戦

菅沼 博

対空砲火

湾岸戦争の時、一番初めにテレビのニュース番組で目にしたのは、イラク軍だと思われる対空砲火の画面であった。

それは高射機関砲のダイダイ色の曳光弾が整然と空に向けて発射されている様子である。

どの曳光弾も順序よく追い越すことなく、また、ふらふらする事無く空に向けて光の尾を引いていた。

昭和二十年の三月から六月まで明野教導飛行師団にいた時のことである。

名古屋が猛烈な空襲を受け、名古屋方面の空は夜目にも明るく真っ赤に燃えていた。空にはB29の編隊が爆撃のために飛んでいるに違いなかった。

この時の空襲はあまりにも激しかったため、今でも記憶の底に鮮明に焼きついている。あの有名な名古屋城の金の鯨鉾が燃えおちた時の空襲であったに違いない。

明野と名古屋との間は相当の距離がある筈であるが、その時、私は兵舎の屋根上で名古屋の空

襲を見物していた。

無数の探照灯の光は空に向けて敵機を探している。明野から名古屋まで数十キロも離れているが、探照灯が敵機を捕捉する度に、高射機関砲が猛烈に打ち上げられているのが弾の曳光により良く解った。

敵機は見えないが、探照灯の光が二本又は三本交わる所には敵機がいるに違い無かった。

その交わる方向へ、無数の曳光弾が盛んに撃ち上げられている。

その弾の曳光は時として、ふらふらするものが交じっている。また、同じ所から発射されているにもかかわらず、前の弾を追い越して行くのがある。

弾の速さがそれぞれ一定していないため、追い越したり、追い越されたり、右に左にふらふらしているのが遠目にも良く見えた。

それに引き換え、湾岸戦争の時の高射機関砲の曳光弾の軌道は整然としていた。イラクの地上軍の対空砲火とはいえ、さすが昔と現代は違うんだなと思わされた。

ある日、空襲警報が発令された。相変わらず我々飛行兵は、空襲警報の度に兵舎の屋根上へ避難の定位置であった。

敵のB29は我々の真上に近い所を編隊を組んで、大阪方面へと進んで来た。高度は四千米位で、あまり高いとは思われなかった。

四発の超重爆撃機の十二、三機の編隊でジュラルミンの機体は銀色に輝き、その爆音はあたりを圧するような響きがあった。

何度も敵機の空襲を経験してくと、この空襲は我が基地を目標としているとか、これはどこの都市に向かう爆撃だとか、空を見上げてみると自然に解ってくる。

現代のようにあらゆる情報について最大漏らさず知らせてもらえる訳ではない。ただ我々の耳に入ってくる情報といえは「敵機一個編隊、紀伊半島沖を北上中」

「空襲警報発令」これだけの情報しか我々の耳には入らない。我々の先輩の飛行兵の中には、戦闘機で迎撃に向かう者、地上で飛行機を銃撃または爆撃されないように空中退避させる者、その他基地ではそれぞれが自分の持ち分で動き回る。

この空襲の時は、私は対空射撃の任務から外れていた。どのような空襲が危険で、どの

場合は危険でないということ、が自然に解っているため、屋根上へ退避の定位置となった。

我々の軍隊生活もこの時、二年近く過ぎ、襟には上等兵の階級章もついて、軍隊の要領というものが本当に身について来た。いた。

その日は天気良く、ポカポカした小春日和であった。空襲になれば普通は防空壕か、対空戦闘配置かのどちらかである。

我々同期生の飛行兵達は、兵舎の屋根上で寝そべり、空を見上げて空襲見物する者が多かった。屋根のトタン板は適当に日射で暖まり、春の日なたぼっこには最上の場所であった。

B29の編隊は南の方から北上してきた。明野の南の方角には今の伊勢市、昔の宇治山田市があった。

その市のはずれの伊勢神宮の外宮の近くに、高射砲部隊が駐屯していたらしい。B29はその上空にさしかかっていた。

敵機の進路は我々のいる明野飛行場から外れている。

我々が寝そべり見上げている空のB29の編隊へ、高射砲の弾が撃ち上げられ始めた。

編隊に対する初弾は、最後尾機から敵機体の約二十機長くらいの後方に、爆煙が十個くらいポカポカと見える。

屋根で寝そべって見物していた飛行兵達は

「下手くそ、全然当たらねえじゃねえかよ」

「もつと、前を狙え。次はしつかりやれ」

各人が勝手な事を言っている。

第二弾目の一斉射撃が行われたらしい。今度の爆煙は機体の長さ十倍くらいの編隊後方にボカボカ炸裂した。

その間にも敵機は、我々の見上げる斜め上空を大阪方面へと進んでいる。

「下手くそ」

「何処を狙っているんだ」とかの悪口を勝手にわめいていた。

我々は第三弾目に期待した。

しかし、敵機の編隊が待つわけがない。高射砲陣地上空の都合

がよい射点からは疾うに過ぎていた。射程外になったのである。う、第三弾目は発射されなかった。

敵機は密集隊形をかたく守り、動揺の陰も見せず、青空をバツクに悠々と大阪方面の空襲へと去っていった。

第三弾目を撃つ時間的な余裕があれば、二十機長、十機長と距離は迫って来たのだから、今度こそは弾が編隊のど真中で炸裂したに違いなかった。

その時は切歯やく腕して屋根の上で騒いでいた。これも実機による実弾演習が行われていな

い結果である。

空中戦闘

昭和二十年の初夏の頃になると、敵のB29は高高度を飛行しないので、四千米くらいの高度を飛行してることが度々あった。このような高度で飛来する敵機に対して、明野の戦闘機隊も迎撃を行った。

敵の数十機の編隊の中には時として、遅れぎみの敵機が一機か二機くらいはある。

爆弾を一杯腹に詰め込み、敵陣上空であるため、どうしても速度は早くなる。そうすると、マラソンと同様に遅れる機がでてくる。このような敵機は戦闘機の良い目標となった。勿論、屋根の上で日向ぼっこをしながら、観戦となる。

四千米くらいの高度になると、B29の四発のエンジンや銀色に輝く機体の姿は、敵機でありながら美しいものであった。遅れぎみの敵機に対して四式戦闘機(疾風)の一個中隊くらいが一群縦隊となり、次々に攻撃をしていくのが目撃できた。

遅れている敵機が無い時は、一番左翼か右翼の端の敵機に対して、味方戦闘機は後ろから或は前から近づくと、両翼から機銃の発射煙を吐きながら擦れ違っていた。敵機からも猛烈の射撃しているのか、発射煙が機

体からたなびいていたのが望見された。

敵機が大阪方面から名古屋方面の爆撃を終わり、帰途についているとき、編隊に遅れて単機が一所懸命に遅れまいと頑張っている敵機をよく見掛けた。味方戦闘機の攻撃の結果、損傷を受けたものであったのであろう。

或るとき、見物中に伊勢湾上空をよたよたと帰途途中と思われるB29を見掛けた。我々の兵舎の屋根上からは一万余米くらいの距離と思われた。

我が戦闘機が手負いの敵機を見逃す筈はない。黒い芥子粒くらしい物が付いたり離れたたりしているのが見えるが一万余米を若干越えていたかもしれないので、戦闘機の形は解らなかつた。

突如、敵B29は爆発を起こした。空中分解をした機体は四散し、そのあとは煙だけが漂っていた。翼だけが後に残り、エンジンを付けたあの大きな翼だけがクルクルと回りながら、ゆっくりと伊勢湾上に落ちていった。距離のある彼方のため、何が原因で空中爆発をしたのかはつきり解らないが、敵機の回りに芥子粒のような物が飛び交っていたので、味方戦闘機の攻撃が成功した結果であったのであろう。

爆弾投下

その日も天気の良い日であった。空襲警報が発令され、対空射撃任務が無かった飛行兵達はいつも通り、兵舎の屋根へ上がり、日向ぼっこを始めた。

しばらくして、一機のB29が南方上空から明野へ真つすぐに近づいてくるのが見えた。高度は四千米よりも低いと思われる。何時もの敵機とは様子が違って、敵機の機首は明野飛行場へ向いている。私は近づいて来る敵機を注視した。

その日、私は屋根へ上がるのを止め、兵舎の脇にある防空壕の前で上空を見ていた。

なお近づいてくる敵機B29の腹は、いつものジュラルミンの色をしていない。

腹が黒く見える。即ち、爆弾庫の扉が開いているのだ。

これを知るやいなや、誰かが「爆弾」と大声で叫んだ。

屋根の上で日向ぼっこをしていた飛行兵達は、我勝ちに梯子の所へ殺到した。「急げ、早くしろ」

各人は勝手に自分の都合の良い事を口走っている。

七、八人の者が一度に梯子で降りられるわけがない。後の方の者は屋根から飛び降りた。

その慌てぶりは、何時も大言壮語をしているのが、この時ばかりは滑稽千万であった。

お知らせ

“復元工事の終えた薬師寺へ
行きませんか！”
～一泊二日の奈良への旅～

11月6日(木) 小田原駅前(8:00)～東名～
平城京～法華寺～秋篠寺～旅
館(17:45)

宿泊場所 奈良 白鹿荘(0742-22-5466)

11月7日(金) 旅館(8:00)～薬師寺～唐招
提寺～今井町(古い町並)～東
名～小田原駅前(20:40)

会費 30,000円

受付 10月28日(火) 午後2時より

伊豆箱根トラベル小田原営業所
(23-0266)

小田原史談会担当 勝俣 (34-3939)

初詣 根津神社・谷中七福神めぐりへ

期日 平成16年1月15日(木)雨天決行

日程 小田原駅前(8:00)～根津神社～弁天堂
～護国院～長安寺～天王寺～修正院～
青雲寺～東覚寺～小田原駅前(18:00頃)

会費 4,200円

受付 1月8日(木) 午後2時より

伊豆箱根トラベル小田原営業所
(23-0266)

七福神めぐりは徒歩になります。歩きや
すい服装で参加しましょう。

年間予定では2月の予定でしたが、弁財
天像などの公開日の関係で変更しまし
た。日をまちがえないようにしてください。

小田原史談会担当 勝俣 (34-3939)

私は初めから屋根には登ら
ず、兵舎の傍らにある防空壕の
前に陣取っていたので、彼等の
慌てぶりを煽るように「爆弾！
爆弾」と大声で叫んだ。
屋根上の後方の者の慌てぶり
はまるでマンガである。梯子の
順番を待っていたのでは、敵の
爆弾に身を晒すことになると思
えたのであろう。屋根から飛び
降りた者が二、三人いた。
一階の屋根でも相当な高さか
あったにも拘わらず、怪我をし
た者は無く、その慌てぶりが夕
食の時の話の種になった。
とにかく、私はB29が爆弾を
落とす瞬間まで、注視していよ
うと心に決めていた。

敵機の進路は我々の明野飛行
場を狙っているのは明らかで
あった。にも拘わらず、私が爆
弾を落とす瞬間まで注視しよう
とした理由は、私がいる場所に
対して正対して進行していない
と睨んだからである。敵機の進
路はほんの僅か、毛一筋分ほど
北方へずれている。
北方へずれているという事は、
我々の兵舎が目標ではない。
目標は滑走路である。
我々の兵舎の二百米くらい北
方に滑走路が横に走っている。
現存する自衛隊の明野飛行学
校正門が昔のままの場所である
とするならば、正門に向かって
手前左側は土の広大な飛行場で

あった。その幅は百米くらいは
あった。
要するに、滑走路・本部・飛
行場・我々の兵舎という具合に
並んでいた。
慌てて屋根から降りてきた同
期生達は、我先にと防空壕に飛
び込んだ。私は最初から慌てて
いなかった。
近づくにつれ進路は毛一筋分
ほどずれていることがはっきり
した。
敵機の爆弾は、私が見上げる
丁度正面くらいの場所、即ち、
正面を見据える眼の位置を動か
さずにそのまま、首を曲げ空を
見上げた状態の位置くらいの所
で爆弾が離された。(つづく)

落穂集

○『サムサノナツハオロオロ
アルキ』宮沢賢治の詩を思い出
しながら、みんな冷夏を嘆いて
いました。その後、冷夏を取り
返さんばかりの勢いで、残暑は
厳しく「ヒデリノトキハナミダ
ヲナガシ」となりました。

○八月オリオン座と東宝館が
幕を閉じました。永年小田原を
始め、近隣町村の人たちに愛さ
れ、多くの思い出を残して、旧
市内の映画館はすべて閉じたこ
とになります。

石綿勉氏の情熱をもって『小
田原映画館の歴史』を特別号と
して編集して頂きました。

これに引き続き、本誌も語
り部の会も順次『小田原映画の
文化』を取り上げ、会員の皆様
と共に、思い出を楽しみたいと
思っています。

○紙面等の都合で二編の玉稿
を次号に後らせて頂きました。
また『会員へのお知らせ』を最
低限にいたしました。新米の編
集子の事とお許し下さい。

「これを知らせたい」と思う執
筆者と「こんなことを知りたい」
と思う読者の間に立って、編集
者の皆様と共に、より良い紙面
づくりを心がけるつもりです。

(編集長 植田博之)

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
 小田原銀座 アオキ画廊
 熱海 アオキクリニック
 飛多魚屏
 紳士服の **アメリカヤ**
 (株) **アルファ**
 伝統工芸 **石川漆器**(株)
 税理士 石原和夫事務所
 伊勢治書店
 自動車修理
 板金塗装 **イーマン**
 (㊟) かまぼこ
 (㊟) **小田原ガス**
 小田原報徳自動車
 株式会社 **オートセンター・スキヤマ**
 オリオン座
 かまぼこ籠 清
 カネボウ株式会社小田原工場
 神尾食品工業 株式会社
 木地挽 日下部産業 株式会社
 かみやま小児科クリニック
 興電社
 小伊勢屋
 国府津館
 (有) 小松石材店
COMTEC コムテック株式会社
 さがみ信用金庫
 趣味のこぶく さくらい
 箱根湯本温泉
 雀のお宿 春光荘

小田原 **冬秀のかまぼこ**
匠寿堂 スポーツ
 高木整形外科医院
 邦(うどん) 小田原城趾前 田毎
 網元直営 **あゝる海**
 (㊟) **そびそ二宮**
 茶半家具株式会社
ちんぎょう 本店
 角田ガクフ子店
 東京電力(株)小田原支社
 トーホー建物 齧
 割烹料理 **鳥かつ楼**
 和菓子 菜の花
 八小堂書店
 八子マサ
 平井書店
 (有) **古屋花店**
 株式会社 **報徳**
 建築金物(株)星崎仲吉商店
 家庭金物
 本多時計店
 栄町 **松坂屋**
 学生専科 (㊟) **マルク**
 諸星運輸グループ
 曾我の梅干
 檻辛・かまぼこ **美の政**
 みみづく幼稚園
 竹オマサ株式会社

小田原史談(年四回発行)

年會費 普通會員三千元
〇〇二〇二六四三三六

刊 行 三 十 七 年 十 月 十 日

社 長 小 田 原 史 談

版 替